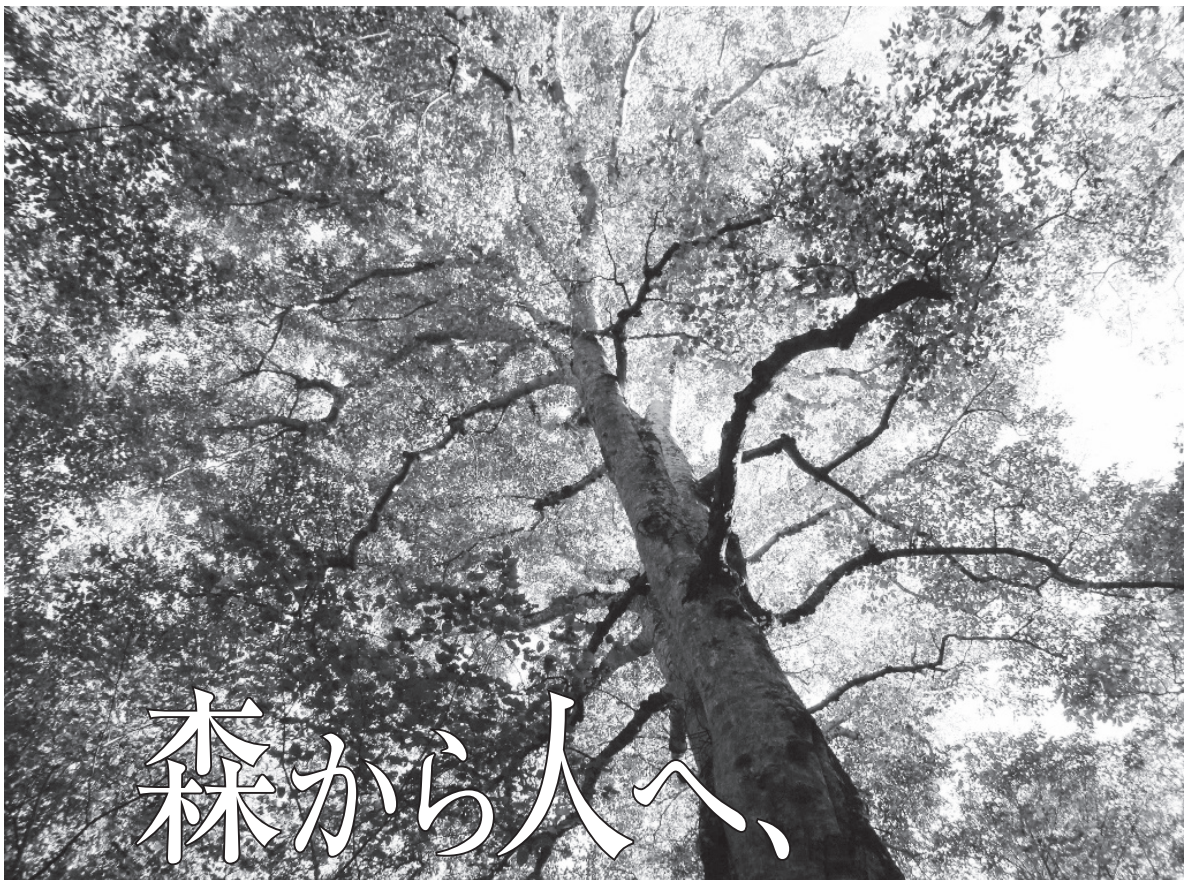


森から人へ、人から森へ

森林社会学研究会 連続講座 第１回

報告書

2015 年 5 月 31 日（日）
文京シビックセンター 26 F スカイホール（東京都文京区）

主 催 ● 特定非営利活動法人 森づくりフォーラム
協 力 ● 森林インストラクター東京会

開会あいさつ

● 原田 敏之（森林社会学研究会 企画委員会）

本日はお忙しいところを大勢の方にお集まりいただだき、また遠いところからわざわざおいでいただいた方もあるようで、どうもありがとうございます。

森づくりフォーラムとしては、実はもう2～3年前から「森林社会学を扱ってはどうか」という議論があがっていました。そのきっかけのひとつには、森林社会学という学問分野が、なかなか組織的な枠組ができていないのではないかということがありました。もうひとつは、森づくりフォーラムの代表である内山さんが二十数年前にまとめた『森林社会学宣言』以後、どんなふうに世の中が変わってきているのか、あるいはみんなの関心がどこにあるのか、それらを少し整理してみる必要があるのではないか、といったことでした。

最近やっと、その運営のための企画委員会を立ち上げ、そこでいろいろと議論を進めるようになり、その中で「今後は少しずつ連続講座というかたちで研究会を進めていこう」ということになりました。その企画委員会での議論の中では、「運営の仕方も少しずつ変えていったらいいんじゃないか」といった意見も出されており、今後工夫を重ねながら、試行錯誤しながら進めていきたいと思います。今回の「森から人へ、人から森へ」というタイトルも、「今後回を重ねていく時にも共通タイトルのようなかたちで扱っていったらどうか」という意見も出ています。

本日は、森づくりフォーラムの代表であり、この企画委員の会長にもなっていただいている内山さんと、『森林社会学宣言』という本を、もうひとり中心となって執筆をされた北尾さんにおいでいただき、様々なお題を出していただくということになっています。

第2回については、10月3日に森づくりフォーラムの理事でもある山本信次さんが中心になって、「ソーシャルビジネス」という分野に焦点をあてたかたちで会を開こうという予定を立てております。それ以後はどんなふうに進めていくのか、また大きくやり方を変えるかもしれませんが、案内を出させていただきながら進めていこうと考えています。

今後ともよろしくお願いいたします。以上であいさつにさせていただきます。

講演 ①

群馬県上野村における森林社会学

内山 節（哲学者、森づくりフォーラム代表理事）

哲学者。立教大学大学院教授、特定非営利活動法人森づくりフォーラム代表理事。存在論、労働論、自然哲学、時間論において独自の思想を展開する。1970 年代から現在でも、東京と群馬県上野村との往復生活を続けている。上野村では畑を耕し、森を歩きながら暮らしている。

“森林社会学”という言葉自体は、この 20 年間くらいで、ずいぶん使われるようになってきましたが、依然として中身がよくわからないという点があります。それはなぜかというと、人と森との関わりが軸になっていく研究なので、場所によって内容が変わるからです。

例えば今日、私が暮らしている群馬県上野村の報告というかたちでお話をさせていただきますが、では上野村のやりかたが、北海道でも九州でも通用するのかというと、これはまったく違うわけです。基本的な「森と人はどういう関係であったらいいのか」という点は同じかもしれませんが、その内容は場所によって変わっていくという性格をもっているのが“森林社会学”だと思います。

ですから今日は、上野村の報告に特化させていただきます。

上野村という村

● 森林はあるが林業地ではない

群馬県上野村は山梨県の近く、奥秩父連峰の方にあり、8 月になると 1985 年の日航機墜落事故のニュースが毎年出てきますが、その村でもあります。

村の面積はかなり広く、その 96%が森林です。歴史的に村には水田というものが 1 枚もなくて、昔は養蚕が中心で桑畑をつくり、またコウゾを植えて和紙もつくっていました。現在、農業的に一番主力になっているのは、きのこ生産です。日本の食料自給率はカロリー計算で、きのこをいくらつくってもカロリー計算上は 0 ですから、上野村は日本の食料自給率にまったく寄与していませんが…。

上野村は 96%が森林ですから、森林をどう活かして地域をつくっていけるかということが課題となります。とはいえ、上野村は伝統的な林業村ではありません。林業地というのは、森があるからできるわけではなく、運び出せるからできるのです。上野村には神流川という川が流れていますが、あまりにも谷川的な川で、円滑に丸太を出荷するのに適している川ではありませんでした。ですから上野村は、江戸期まではいわゆる林業地ではなく、基本的には村人の森林利用という使われかたをしていました。

明治以降になると、村にはクリの木がたくさんあったので、そのクリを伐って山で線路の枕木用に造材して出荷するといった林業がはじまりました。一時期は、日本の枕木シェアの 7 割くらいを押さえていましたし、満州に鉄道をつくったときには、なんと輸出もしていました。また、産業の発展に伴って木炭の需要が増えたため、木炭生産もかなり増えていきました。

昔から自分の家の建て直し用なんかにスギを植えるといった程度のものはありましたが、大規模に人工林をつくるようになったのは戦後になってからで、しかも早目にやめてしまったので、今でも人工

林率は30%くらいです。実際には、長野県側に吉本という林業会社が3,000ha持っていて、それがほぼ100%人工林ですが、村民が持っている山では、せいぜい10%くらいしか人工林がありません。結果としては天然林中心で、紅葉もきれいです。

● Iターン者が多く、合併嫌い

上野村は約1,350人の村民が暮らしています。そのうちの241人がIターンと言われる人たちで、外から来た人が大変多い村でもあります。先日、中学校の入学式があったのですが、今年の入学生は12人くらいで「ちょっと少ないな」という感じですから、同規模の山村を考えれば破格に多いということです。去年評判の悪かった日本創成会議の『増田レポート』でも、上野村は消滅しない村になっていました。このように上野村は、新しい人が入りながら、健闘をしている村です。

また上野村は、明治以降一度も合併していない、合併大嫌いな村なのですが、それは市町村としてだけではなく、農協も「上野村農協」、森林組合も「上野村森林組合」として、他と合併しないかたちを保っています。そういう村は、他にはほとんどありません。

上野村は、村づくりを役場と農協と森林組合、あと主要な第三セクターが3つありますが、そういうものを組み合わせて、あるいは分担しあって、できるだけ自分たちの力で村づくりをしていこうとしています。

森林を軸とした村の体系づくりの取り組み

上野村は4、5年前から、念願であった森林を活用して村の体系をつくっていく方向に動きはじめています。

● 森林作業員はほぼ100%Iターン者

現在は、山の中で働いている人たち、つまり人工林の手入れや伐採を行っている人たちが25人いて、これはだいたい適正規模という感じです。この25人は、ほぼ100%がIターン者です。村の人たちが一緒にやっている場合もありますけど、ほとんど指導員的な感じで、外からきた人たちが主となって山で働いています。

● CLTを検討中　木工産業はすでに定着

そうして出てきた材を製材する製材工場も少しずつ拡張しています。いま考えているのは、CLT（直交集成板）という、厚い板を貼り合わせた特殊合板みたいなものです。ヨーロッパでは、これを使った木造ビルの技術が確立していて、一番高いものでは、たしかオーストリアに11階建てのものがあります。日本の場合には地震等の対策もあるのでしょうが、技術的にはおそらく問題ないはずです。そのCLTをつくることを検討中です。

また上野村は1974年から木工の育成を行っており、現在は約40人が木工部門で仕事をしています。上野村は天然の木が多くあります。最も多いのはケヤキとトチで、またシオジというケヤキとよく似た材質の、角材にはとても良い木もあります。そういった木に付加価値をつけて売っていくということで、まず若い木工希望者を役場の職員として雇い、木工の産地に徒弟に出して、技術を覚えて帰ってきてもらうというかたちで進めていて、現在では年商約2億円の産業として定着しています。

● 関東一のキノコ生産施設もあるが…

さらには、主にコナラのおが屑をつくり、それでキノコを生産しています。個人でキノコをつくっている農家は別にして、キノコ生産関係の第三セクター直営で働いている人が65人います。建設費約12億円の大規模なキノコの室内生産施設があり、一貫生産のキノコ生産施設としては関東では最も大規模なものです。

ただ残念ながら、これはうまく機能していません。3.11の原発事故で、上野村のおが屑からセシ

ウムが出てしまったからです。上野村のセシウム濃度はほぼ東京並で、群馬県内でも一番低いくらいなのですが、それでも出てしまう。国の基準からみれば微々たるものであっても、そのことで使ってくださる方に不安感を与えてしまえば、村のイメージを毀損してしまいます。ですから現在は、残念ながら村の材からおが屑をつくることができず、九州からおが屑を入れてきのこ生産をやっています。

● ペレット生産と熱利用、発電利用

4年くらい前から、木質系のペレット工場が動き出していて、材として使えない木を活用しています。

上野村は温泉が4つあるのですが、いずれも加熱が必要です。以前は石油や電気で加熱をしていましたが、現状はもう100%ペレットによる加熱に移行しています。また、小学校や役場といった比較的大きい建物の暖房も、すべてペレット化されていて、現在は一般民家へのペレットストーブの導入を推進している最中です。ペレットストーブは設置費用を含めて大体35万円～40万円かかりますが、例え年金暮らしのお年寄りの家でも導入してもらえるように、その80%を村が補助するという大胆なやり方をとっています。あと2、3年はかかるでしょうが、かなり浸透し始めたという状況です。

今年の4月からは、キノコの施設のすぐ脇で、ペレットを使った発電機も動き始めました。

ペレットでの発電となると、普通はペレットを燃やして発電すると思われますが、上野村の発電機はドイツ製で、ペレットを一旦蒸し焼きにして、そのときに発生したガスでタービンを回すという少々複雑な方式のものです。ペレットを燃やして発電する方式だと熱効率は約20%なのに対して、このガス化してタービンを回す方式だと約32%になり、より効率が高いのです。

タービンを回すと、当然ながら車のエンジンと一緒で、熱が放出されます。その熱も回収して、これは主にキノコの施設の冷房用に使っています。キノコの施設は、冬は暖房を使うこともありますが、年間で9ヶ月くらいはクーラーが回っています。以前はクーラーの電気代が甚大だったのですが、それを熱回収で回しているわけです。そうした活用によって、発電効率と廃熱利用を合わせることで、相当良いエネルギー効率になっています。

● 観光も森林関連産業に位置づけ

さらに上野村には、観光地として年間20万人ぐらいの観光客が来ます。宿泊施設が多くないということもありますが、7月、8月は、いま予約を入れても、たぶん取れません。案外上野村は、人口の割合に対してお客さんが多い村なのです。いわゆるレジャー施設的なものがあるわけではない上野村に来てくれる観光客は、「昔からの村を守っていこうとしている雰囲気が良い」と言って来てくれる人たちが大半です。

そういう意味で上野村は、かつてからの村の暮らしがあって、森林や畑があってというものが、そのまま観光の資産となっています。ですから観光も、森林をどう守っていくのかということと関連しているのです。

上野村では観光も森林関連産業と位置づけており、宿泊所等に直で雇っている人たちが30人くらいいます。それ以外に民間で行っている観光産業も合わせると、雇われている人の数は大体150～160人くらいになります。

● 森林関連産業での雇用は約400人

このように上野村では、森林活用の下で、多くの人たちが働いています。

先に申し上げたように、上野村には役場と農協と森林組合、第三セクターが協力して村の仕事をつくってきた経緯があります。そこに雇われている人たちの数も合わせると、約400人になります。上野村の産業の大半は、そういうところに依存していると考えてもらって良いでしょう。

ただし、これらをずっと役場が経営するというわけではなく、採算が合うことが確認された時点で、

民間への移管も進めています。

● 多様な組み合わせによる村の体系づくり

これらの他に、上野村は昔から味噌の生産量が多く、これは主に農協が行っています。お菓子や加工品づくり、レストランやスーパーの経営等も農協が行っています。堆肥をつくっている施設は森林組合が行っています。

イノブタというイノシシとブタの一代雑種の生産は村役場の直営で行っています。また、実は群馬県は元々うどんの地域なので、そばはないのですが、観光客は山の中はそばだと思い込んでいて「そばはないのか」と言われる多くて、ついに村営のそば屋をつくりました。村営というと不味そうですが、木工と同じようにちゃんとそば屋に修行に行ってもらっているので、かなり美味しくて、人気店となっています。村役場が運営しているカフェや売店もあります。さらには炭づくりも村役場の直営です。

上野村はかなり早い段階、20年くらい前から全部の家を光ファイバーで結んでいます。それで村内の電話とテレビが使えて、月額500円。さらに村がプロバイダを開設していて、インターネット的な利用をすると回線利用料が無制限で、これも月額500円。ですから、月に1000円払っておけば全て大丈夫という仕組みになっています。

遊休農地化しているところには、高齢者の共同農場を開設しています。そこでは、「暇があったら来て一緒にやって」というスタンスで、作業をするとおこづかい程度のパート代が出ます。これはむしろ、高齢者の健康面への配慮でもあり、健康でいてくれれば医療費も少なくて済むということでもあるのですが、結構評判が良いようです。そこに都会の人が来て農業を教わるというケースもあって、高齢者が張り切って教えています。これも健康には良いのでしょう。

このように上野村では、いろんなことを組み合わせて村の体系をつくりだしているのです。

● Iターン者への対応

上野村はIターンの新規住民が多いということで、住宅難となっています。田舎はどこでもそうですが、いわゆる空き家らしきものはあるけれど、貸したり売ったりしている家がないのです。田舎の家は、「家のなかに仏壇があるかぎり空き家ではない」ということなのです。そこで村では、大量の村営住宅をつくって対応しています。家族で来るとだいたい3LDKの一軒家で、家賃は平均して月に1万2000円くらいです。

上野村にIターン者が多い理由として、上野村に来てから3年間、所得が15万円に満たない場合は、その差額を最大5万円まで役場で保障するという政策をとっていることがあります。「3年間は生活できるようにするから、3年間でなんとかしてよ」ということです。また、結婚すると結婚祝いを、出産すると出産祝いをくれますし、第三子からは月額5万円の子ども手当があります。実は昨年末に一家族が引っ越して来たのですが、大人が4人、子どもが11人、合わせて15人という大家族でした。その家族は、村で空いていたうどん屋を再開させてくれているのですが、この家は子ども手当も相当入っているだろうという気がします。それでも上野村としては、空いている施設は使ってもらったほうが良いのです。

上野村には、木工を中心とした職人さんが結構

いるのですが、子どもが跡取りになってくれれば良いけれど、そうでない場合は後継者をどこかで育成しなければなりません。しかし、現実として職人さんには、そのために新しい人を雇うだけの余裕がありません。実は、雇ってほしいという人は山のように来ています。ご両親が一緒に来て「生活費は自分たちで保障するから、ただでいいから雇ってくれ」という例もあって、時代がずいぶん変わってきたという感じがします。ただ、きちんと教えていこうとなると、「ただでもいいから」というのは、良し悪しが難しいことだったりしますので、結局は雇いきれないということが起きています。

今年の4月1日から、この問題を解消するために、これも3年間ですが、職人後継者育成のようなかたちで雇った場合、雇われた本人に月額15万円、3年間支給するという制度ができました。つまり、「役場のほうで給料払うから雇ってくれ」ということです。また親方は、はっきり言えば何にもできない人を雇うわけですから、かえって仕事の邪魔になるという問題が起きるので、親方にも師匠代として月額7万円を支払うということになっています。合わせると22万円になります。

● 高齢者問題はすでに対策済み

上野村は30年くらい前にはもう、高齢化率が40%に近づいていて、最大時には42%になりました。そうなると高齢者対策に振り回されてしまうのですが、上野村では早めにそれを行っているので、実は高齢者対策は終わっています。デイサービスセンターや、中間的な高齢者の集合住宅等があり、家にお弁当を届けたり、お風呂に連れていってあげるサービス等、いろんなものがすでにできあがっています。地域の人たちで助けあう部分と公的な支援の部分を、どう組み合わせたらば最適化されるかを、役場も住民も知っています。

このように上野村には、40%高齢者がいても生活ができる地域社会が、ごく普通にできています。ですから、むしろ中年・青年対策に予算を集中できる状況になっているわけです。Iターン者が多いということもあって、現在の上野村の高齢者率は約39%と若干減ってきています。

都市部はこれから高齢化問題が激しくなりますが、田舎に行けば行くほど、実はこの問題はもう解決済みという状況が発生してきています。それを有利な状況としてどう使っていくかということも、今後の課題として挙げられるでしょう。

森林社会学の考え方

● 村が守られていく労働の体系ありき

今日こういう報告をしているのは、例えば森林利用と言ったときに「じゃあ林業ですか」「ペレットですか」と言われても困る、ということがあるからです。

地域社会をつくっていく中で、地域に持続可能な労働の体系をどうつくるか。それが持続可能な地域社会をつくることにつながります。ですから上野村でも、森林をどう使うかという話は二次的な課題なのです。あくまで、まずは地域社会をどうつくるか、それをどう持続可能にするのかがあって、その上で96%ある森林をどう有効に使っていくのかが課題になるわけです。その使い方の中に、ペレットやCLT、あるいは炭焼きなども含めて、いろんなものを組み合せながら、持続可能な労働の世界をつくっていこうとしているのです。

上野村は、それぞれが行っている経済活動を足すと村のGDPになるという考えかたを転換しようとしています。そうではなくて、村が守られていく労働の体系があり、その労働の体系のなかの一部分をそれぞれが引き受けているという考え方です。その中に、例えば「わたしは農家としてキノコをつくっています」といったことがあるのです。

地域社会を守っていくためには、地域の労働の体系をどうつくるかが先決です。個別の経済活動から始めてしまうと、結局、全体のまとまりが悪くなって地域社会を守れないことになりかねません。

森林社会学というのは、森林のみを考える学問ではありません。あくまで森と人との関わりです。上野村であれば、どんな関わり方をしていけば森も生きていけて、そこで暮らす人たちの世界も維持できるのかを考えていかなければならないということです。

● 地域、労働、生活デザインの組み合わせが森林社会学の課題

上野村ではペレット生産を、これ以上増やす予定はありません。現在ある発電機は 280kw/h ですので、ペレット発電だけで村の電気を全部賄おうとすると、もう 5、6 機は入れなければなりませんが、今のところその予定もありません。

もちろん上野村には無尽蔵に山がありますし、奥の方まで使えば今の発電容量の 10 倍でも 20 倍でも発電できますが、低コストで出せなければ発電代が高くなってしまうという問題が起きます。現在の生産量は、低コストで出せて、持続的に森林を荒らさずに使える量なのです。一方で、もう少し奥の森林から低コストで搬出する仕組みにも研究はしていますが、その目処が立たない限りは、ペレットの生産量を増やす予定はないということです。

また発電量的には、むしろ水力を使いたいという長年の懸案もあります。上野村には砂防ダムが結構あるのですが、ここでは上から水が落下していますから、それを使いたいということです。堰堤の高さによって発電容量が変わりますが、堰堤が高い砂防ダムの水の落下を使うと、上野村のペレット発電機と同じくらいの発電容量になるケースが多いのです。この件は国土交通省関係なのですが、以前、国土交通省は「あれは砂防目的であって、発電目的ではない。もし行うのであれば法改正が必要」と、一切応じてくれませんでした。ところが最近は、熊本県で県営砂防ダムができたケースもあって、国土交通省としてもあまり突っぱねるのもまずくなってきたらしくて、「ちょっと検討し直します」ということを言い始めているので、可能性が出てきたところです。

そんなことも検討しながら、いずれは地域でエネルギーを全部自給したいというのが現状です。

結局、これからの地域をどうつくっていくのかという“地域のデザイン”、そこで人々がどういう働き方をしていくのかという“労働のデザイン”、そこでどんな生活をしていくのかという“生活のデザイン”等をいかに組み合わせながら人と森との関

係を考えていくのかが、森林社会学のひとつの課題なのだろうと感じています。

● 不可欠な外部の人たちの協力と
そのための“共有感”

また、いま地域デザインや経済デザインを行おうとするときに、どうしても欠かせないものがあります。それは、地域の外部の人たちがどんなふうに協力してくれるかという問題です。

上野村は山村の中では裕福な方ですが、そんなにお金があるわけではありません。ドイツ産のペレット発電機も、最終的には日本の商社にかんでもらって入れているのですが、それは後で部品等が必要になった場合等に機敏に対応するためです。このように商社に入ってもらってはいますが、選定はきわめて低コストで行っています。そこにコンサルタント会社なんかを入れてしまうと、無駄なものを買わされてしまったりする可能性も出てきますが、上野村には外部にかなり多くの応援団がいますので、そういう人たちが協力をして、最適な発電機を見つけたのです。

実は役場の担当課長がこの発電機を使っているドイツの村に視察に行っているのですが、もう一人、東京の人が一緒に行ってくれています。選定の過程でも協力してくれていた人ですが、言葉ができるので通訳をつける必要もなく、使っている村や発電機メーカーの視察がスムーズに行えました。今は世界中で携帯電話がつながりますので、たえず村長と電話で連絡取りながら「だったらもう発注してしまえ」みたいな感じで話が進んだそうです。最終的に契約上は商社を通した形をとっていますが、そこまでのコストがものすごく安くあがって、非常に上手くいきました。

私は上野村は40年以上暮らしていて、ある時に気がついたのですが、上野村には理工系の人がいないのです。おそるべき文科系社会で、最近は大学を出て村に帰ってきている人も結構いるのですが、みんな文科系です。昔からいる、進学しないで村で暮らしてきた人たちも、頭の中は文科系です。そんな村の人たちが発電機の性能を吟味するといっても、到底難しいわけです。ですから、理科系の外部協力者が絶対に必要なのです。

そんなことを含めて、これからの社会デザインをしていく必要があります。そして、その中に森林社会学も内蔵されているのではないかと思います。

そのためにも重要なのは、地域はそこに住んでいる人だけではなく、外部の人も含めて共有されている世界だという“共有感”でしょう。

例えば上野村の祭りは、ひとつの神社を除いて(ここは昔からの習慣で、その年の年男が紋付き袴で神輿を担ぐことになっています)、都会の人にも神輿を担ぐのに加わってもらっていたりします。そうして「この地域がずっと続いてほしい」「自然が損なわれずにずっと続いてほしい」といった願いや思いがオープンになって、はじめて共有ができていくのでしょう。そういうものが、日本の伝統社会の姿なのだろうと思います。

そうなると地域社会にはいろんなローカル信仰があるわけですが、現在こういう問題は非常に発言しにくくなっています。

実は“宗教”や“信仰”という言葉は、明治時代にできた翻訳言語です。ですから言語上、日本には江戸期まで宗教も信仰もなかったわけです。それでも仏教も神様もいたわけで「あったじゃないか」と言われるのですが、現在の私たちがイメージしている宗教や信仰とは違います。当時の信仰は、自分たちの生活世界に対する願い、自分たちの生活世界が持っているつながりを守っていくことへの願い、あるいはそのつながりを守ってくれている神仏への願いといった志向のものであって、いわゆる“宗教”といった別次元の世界ではなかったのです。ですから、暮らしの中にも、地域を見る目の中にも、もちろん労働の中にも信仰があり、それらの結節点として祭りがあったわけです。ですから本当は、いま、宗教学や民俗学とかとは違う視点でローカル信仰きちんと捉えることをしなければな

らないのではないかと思います。

そういうものを共有しながら、外部との協力体制をつくっていくということです。そうすると、単に利便性を提供するのとはちょっと違う、もっと深い一体感というものが生まれるのではないでしょうか。そういうものを含めた外部の人たちとの共有も、これからの課題になっていくような気がします。

● ローカルデザインの集積が森林社会学

ちなみに上野村は、もともと山岳信仰系の強い村で、山の中に人びとが彫って祀った石仏が、いままで発見できているもので 800 くらいあります。たぶん 1000 くらいはあるでしょう。そうやって、いろんなことを願ってきたのです。

また、上野村のグループが、県から 300 万円くらい補助金もらって、村のなかにある樹種ごとで一番大きい木を探し出し、地図つくりました。上野村では、大きい木で圧倒的に多いのは、やはりトチノキです。他にもケヤキなどで大きいものもありますが、なぜかトチが圧倒的に残っているのです。実は、山のなかには“山の神が休憩する木”というものがあり、それは村の人が見ればすぐ分かるそうで、「林業関係者はいまでも、山の神が休憩する木は伐りません」ということなのです。そういう木がトチであることが多いので、トチが大木が残っていくということです。

この話にしても、「山の神がほんとうにいるのか」「ほんとうに休憩するのか」と言われると困ってしまうのですが、上野村の人たちはそういう思いを持ちながら、森とともに生きてきたわけです。

そういったローカル信仰なども全部含めて、私たちは地域デザインや社会デザインをしていかなければならないし、そのなかに森林社会学があると思います。そして、上野村ならば上野村の森林社会学をつくっていくわけですが、それは上野村の人だけでつくるのではなく、上野村という世界を共有してくれたり協力してくれたりする人たちと一緒につくっていくことが必要になります。

つまり森林社会学は、一種のローカルデザインの集積であって、公式みたいなもので日本中が整理できるというものとは違います。ですから、私たちがこれからつくりたいと考えている“森林社会学会”も、ローカルなフィールドをベースにしながら、いろんな人たちが加わってくるかたちができればと思っています

いまの森林業界では、「門戸を広げましょう」となると、「じゃあ製材屋さんや工務店さんにも入ってもらいましょう」とか、「消費者側にも入ってもらいましょう」といった考えかたになります。もちろん、そういうことも大事なのですが、やはり森林社会学というのは、関係者を集めて開かれた学会をつくるとかいうやりかたとは違うのではないかと、私自身は思っています。むしろ、はっきりフィールドを持ちながら多様な展開をしていくことがまずあって、そのフィールドのなかに製材屋さんや工務店さんがいるという感じでしょうか。

このあたりについては、これからいろいろ議論をしていければと思います。

講演 ②

〈京都と森〉の森林社会学

北尾 邦伸（島根大学名誉教授）

1942 年大阪府生まれ。京大林学科卒。島大名誉教授。前京都学園大学環境デザイン学科教授。現在、島根県立大学総合政策学部と大学院の非常勤講師（「環境保全論」および「環境社会学」）。主要著書に『 森林環境と流域社会』（雄山閣出版）、『森林社会デザイン学序説』（J-FIC）、「市民社会論としてのコモンズ論へ」（井上真編『コモンズ論の挑戦』所収、新曜社）、「地域のなりわいとエコツーリズム」（「科学」誌 所収、岩波書店）などがある。

はじめに

いま私は京都に暮らしていますが、東山三十六峰といわれる、なだらかでゆるやかな山々のつらなり。これがなんともいえない味わいがあります。清少納言は枕草子で、「春はあけぼの」が一番といっています。その「やうやう白くなりたる山ぎわ 少しあかりて」「紫だちたる雲のほそくたなびきたる」がなんともいい、と。朝早く起きればその景色にいまも清少納言とともに浸れるわけです。

それから東山如意ヶ岳のすぐ下の大文字山の「大」という字。京都の街のいたるところから見やれます。そして、毎年 8 月 16 日には、すべての京都市民が、火が焚かれて照らし出される「大」の字を仰ぎ見るわけです。お盆に先祖の霊を迎え、最後の日に五山で火を灯して霊を送くる。この「五山送り火」という行事がいにしえの時代からつづいている。それが京都です。

祇園祭。明治の前までは祇園ごりょうえ(御霊会)といわれていました。先日葵祭が終わったところですが、今年ももうそろそろ祇園祭がはじまる時節になってきました。祇園祭は 7 月 16 日の宵山、17 日の山鉾巡行だけじゃなくて、その前後で 1 カ月間ほどいろいろな神事がつづいて執り行われているのです。

また、北東の比叡山、西の愛宕山がだいたいどの地点からも見渡せる、そういう盆地地形のなかで京都人の生活。

お豆腐屋さんが街のいたるところにありまして、それぞれのお豆腐屋さんは自家用の井戸の水を使ってお豆腐・ゆば・おあげをつくっておられる。老舗の料亭というのも大抵井戸水を使っています。伏見の酒をよくご存知のかたも多いと思いますが、「伏見」っていうのは、「伏水」のことです。少し掘るか、極端に言えば竹筒を突き刺せば水が湧いてくる。

また、私の住んでいる家にも、春・夏になりますと上賀茂のおばさんが野菜を売りにくるんです。いまは小さな軽トラで来られますが、ちょっと前までは大八車でした。1 週間に一度なんですが、私も女房も楽しみに待っている。少し前までは「大原女」、「白川女」が、着物を着た娘さんが、頭の上に束ねた薪やお花を乗っけて振り売りにやって来ていたとのこと。

こういう京都での暮らしの話が、森林社会学につながってくるのか、よくわかりません。何をお話申し上げればつながってくるのか、この間ずっと困っていました。3 月の中旬くらいに事務局の方から、「話題提供をしてもらいたいが、5 月 31 日は空いていますか ?」っていうメールがありました。つい、「はい空いています」って言ってしまったんです。内輪の 15 人程度の小さな勉強会だと思っていまして、

気安く引き受けたんですね。私が過去に書いた何らかの書き物を素材にして解説すればよいのかなと思って。

しばらくして、「京都の森の森林社会学」といったものを主題にしてほしいとの要望があることがわかりました。「京都の森」での現地実態調査はしたことがありませんので、〈京都と森〉にタイトル変更させていただいて、いろんなことをにわか仕込みして、いまこの壇上に立たせていただいているという次第です。

「そうだ 京都 行こう。」(写真 1)。これは JR 東海のキャンペーンのキャッチフレーズです。だから新幹線車内で見られた方もあるかと思います。

「日本に、京都があってよかった。」(写真 2)。これは京都市がやっているキャッチコピー。京都の市バスや地下鉄列車にこのステッカーが貼ってあります。

やみくもに京都観光案内の資料を突っ込んでも埒があかないので、ふたつの文献に依拠した型枠を用意しました。ひとつは松岡正剛の『方法日本』という三部作の本です。これに真似して「方法京都」っていうのを考えてみました。京都と森のいろんな事象や知見をとにかく、彼の言葉ですが「ソロえてアワせて、スく」ことをやってみた。

スくというのにいろんな漢字をあてはめることができます。紙を漉くの「漉く」でもいいですし、金偏に助けるという「鋤く」の字をあてるのも意味あることです。梳く、空く、透く、抄く、スクリーニング。さらに数寄者の「数寄」ですね。ものの編集の仕方にかかわることです。だから京都の文化というのは、知の方法論とか知の構造に関心があるというよりも、編集の方法、すなわちソロえ・アワせ・スき。このことが形成され、洗練されてきた場所が京都なのです。松岡さんが述べていることそのものですが。森林社会をデザイン・編集するにあたって、参考になるのではと考えています。

固有の日本文化というのがあって、それが京都

(写真 1) JR 東海のキャンペーンキャッチフレーズ

(写真 2) 京都市のキャンペーンキャッチフレーズ

で形成され、いまも古層として生きているはず。このようなアブダクション(デザイン脳)を働かせてみるのは楽しいことです。その京都文化形成期は仏性とか、霊性とか、神とかいうのが生活のなかで活きていた時代です。このことを覗いてみることにいたします。

それから、もうひとつ参考にしたのはオギュスタン・ベルクの『風土の日本』です。和辻哲郎の著名な本には『風土』というのがあります。これには「人間学的考察」っていう副題がついています。風土を人間存在との関連で考察するということですね。オギュスタン・ベルク『風土の日本』の方についている副題は「自然と文化の通態」です。オギュスタン・ベルクはフランス人ですが、フランス語での原本のタイトルは『野生と人為』。何が言いたいかというと、自然と文化のその間、そういう自然と文化の通態す

る間に、森と人間の存在の豊かさ、関係の豊かさがあるはずだということです。

そういう構図を頭の片隅において、「風土の京都」というのを考えてみたい。ということで、「方法京都」「風土の京都」を見ていきます。

風土の京都

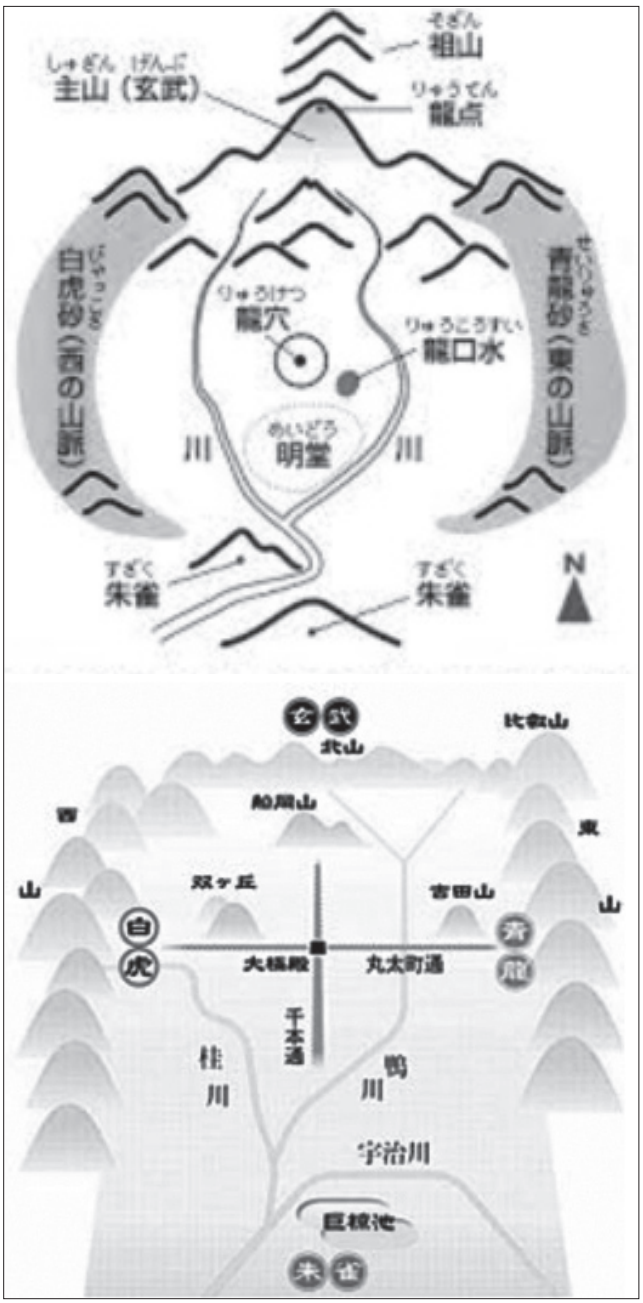
日本の「京」っていうのは、中国の長安、洛陽を見習ってつくったわけです。京都の右京を長安、左京を洛陽と見立てていた時代もありました。中国を見習って、都市計画的なといいますか、条坊制の都市をつくった。

漢字の「京」は、写真３のような城門の象形からきています。次に「都」は、「みやこ」、宮・処ないしは御・家・処です。これが京都。場所的に狭くいえば洛中が京都です。この京都と「森・山」がどういう形で「風土の京都」をつくってきたか。

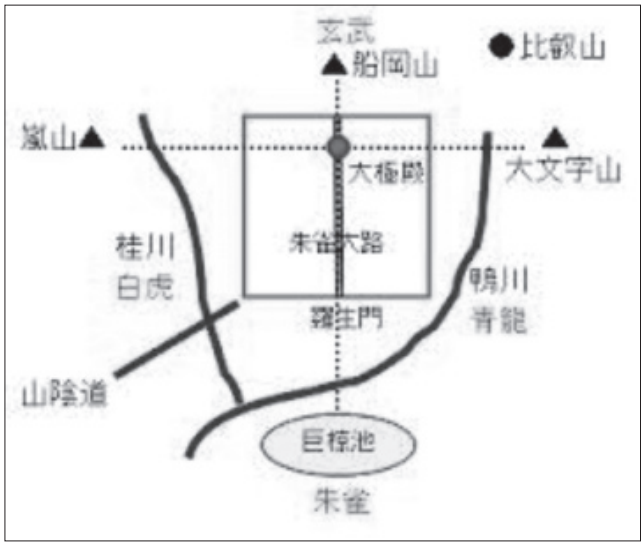
風水でいうところの蔵風得水、四神相応の地を選んで京都をつくった。天の気と地の気、玄武・白虎・青龍・朱雀を配する土地です。今はもうほぼ宅地に変わっていますが、かつては南の方に、朱雀に、巨大な巨椋池（おぐらいけ）がありました（図１）。

また、鴨川と桂川が流れ、龍脈がむかう龍穴のところに宮殿を建設しました。平城京も藤原京もこういう風水の考えを取り入れて建設しています。大和三山、耳成・畝傍・天香具山を配した場所での条坊制都市が藤原京です。

（写真３）京（洛陽）の門



（図１）理想的な風水地形と京都



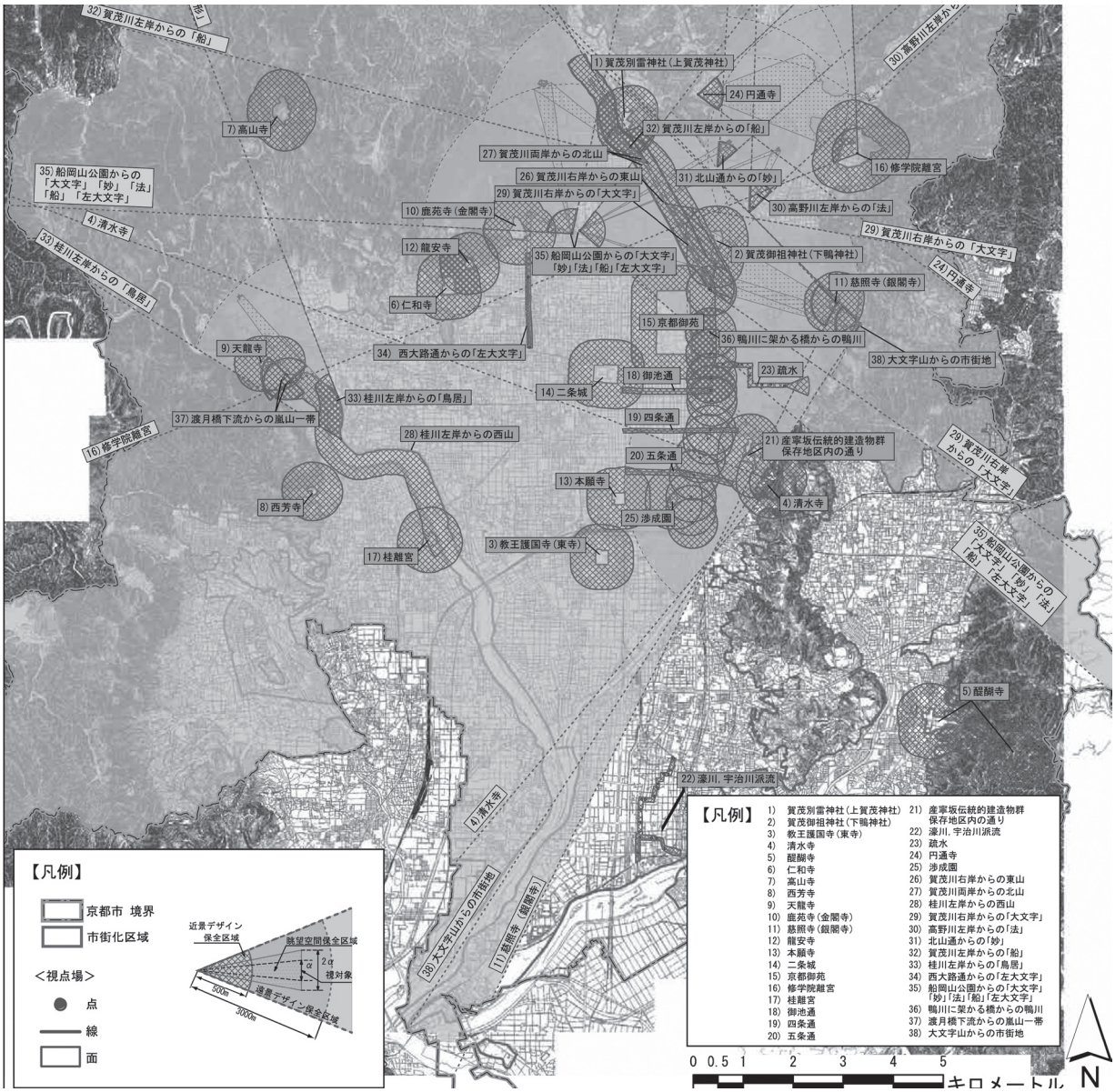
（図２）京都三山と平安京

京都の三山は、北山・西山・東山。狭くは船岡山・嵐山・大文字山です。ないしは船岡山・双岡・吉田山（神楽ヶ丘）。いずれにしても船岡山を一番の北にし、朱雀通りを通して、平安京をつくったわけです（図 2）。

京都の森林景観

2007 年に京都市は「眺望景観創生条例」を制定しています。「視点場」から、①境内の眺め、②通りの眺め、③水辺の眺め、④庭園からの眺め、⑤山並みへの眺め、⑥「しるし」への眺め、⑦見晴らしの眺め、ハチ見下ろしの眺め、の 8 種類の眺め、そういう視対象ないしは眺望を確保するための条例です。だから、例えば加茂大橋の上に立てば大文字山が明瞭に見渡せる。円通寺の庭からは比叡山の全景をうまく借景として取り込める、といった景観保全。このかなりきめ細かな、めんどうなこと行政的にやろうとしているわけです。

インターネットから詳細な情報を引き出すことができます (図 3)。眺望景観保全地域図の凡例を見ると、景観保全行政の「景観」には、遠景・中景・

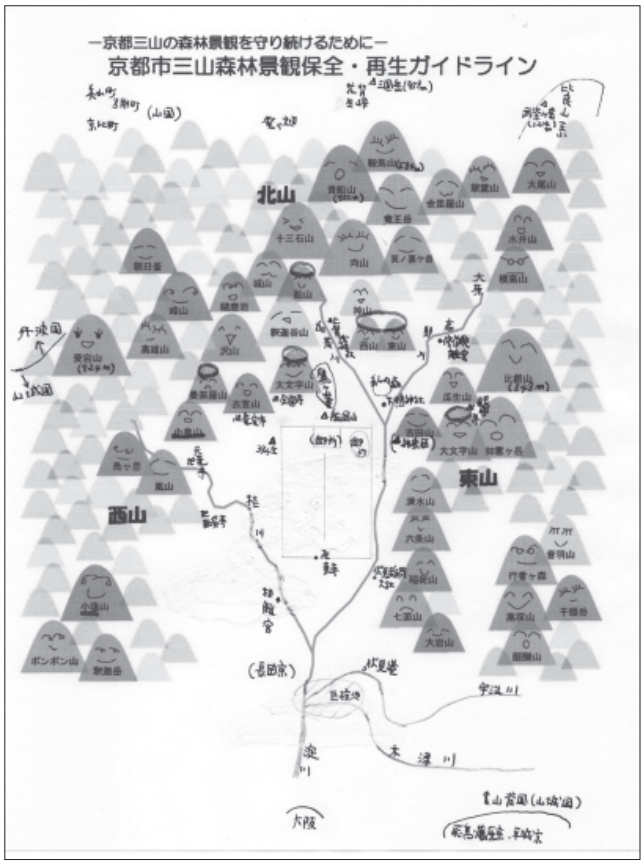


（図 3）「眺望景観創生条例」の眺望景観保全地域図

近景、それから至近景といった捉え方が入ってきます。視点場からの眺望をこういうふうに確保する、ということが実行されています。

図４は京都市都市計画局が作成した「京都市三山森林景観保全･再生ガイドライン」の､北山･西山･東山のいろいろな山々の名前が付されたイラスト図です。中央部分が洛中です。小倉山の向かいに嵐山があります。賀茂川と高野川は、出町柳の下鴨神社・糺の森のところで合流して鴨川になります。鴨川は下流で桂川に流れ込み、桂川と宇治川と木津川の三川が合流して淀川となって大阪に至ります。この三川合流地点に広がっていたのが巨椋池や湿地帯だったわけで、私がいつもテニスで遊んでいる大原もここにありますけ。

京都に「京都モデルフォレスト協会」というのができていまして、府の林務課が中心ですが、その府と民とのパートナーシップで、森の保全事業が取り組まれています。

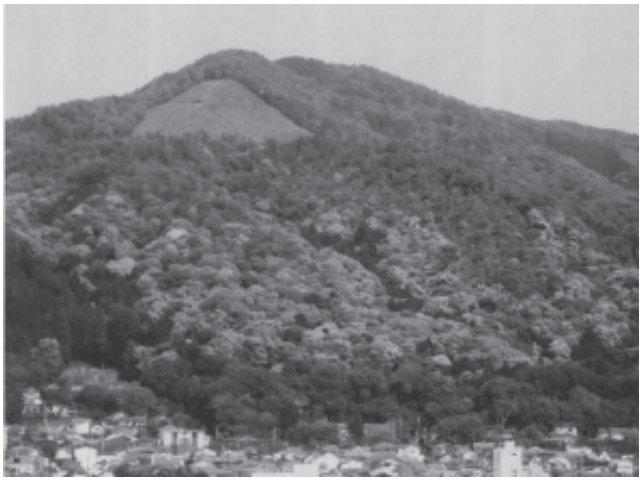


（図４）「京都市三山森林景観保全・再生ガイドライン」イラスト図（に加筆）

写真４は大文字山ですが、白っぽくみえているのはシイの春先の花です。近年、シイ・カシ類が増えてきた。里山利用が放棄されて、常緑広葉樹の森への植生移行が進んでいます。これが一つの問題です。それからカシノナガキクイムシによるナラ枯れも進んでいます。アカマツの大木もマツ枯れで次々と消えていってます。これらをめぐる「環境」保全ができるかどうか、難しいところです。

わたくしは学生時代、銀閣寺のすぐ近くに下宿してたんですが、いつもは観光客や修学旅行の団体でごった返していて面白くないんです。しかし、一度バケツをひっくり返すような大雨が降った時に、「よし今だ」と下駄で走り込んだことがあります。縁側に座って銀閣寺の庭をひとり占めできたわけですが、アカマツの赤くて太い樹幹が雨の中に迫ってきた。上の方や離れたところはまったく視界がきかないんです。ただ、マツが迫ってくる。どう表現していいか、なんともいえない「いいな」という思いが印象に残りました。京都のアカマツ保全をめぐる森林社会学もありかもしれません。

写真５は、瀬田勝哉さんの本から借りてきたものです。上が現在の嵐山で、下がかつてのその姿です。昔はもっと疎林の山でした。いろんな下枝だとか枯れ葉とかを利用のために取り出す、それから採草利用もしていたためです。しかし、もとより嵐山は秋のもみじの紅葉、春の山桜が景観的



（写真４）大文字山

に美しくて有名な名所です。鎌倉時代に後嵯峨上皇が亀山殿を小倉の地に建立しました。その時に、嵐山に吉野の桜をもってきてずいぶん植えさせたという記録があります。

小倉山のことを亀の甲羅のような形をしているので亀山ともいうわけですが、室町時代になって足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うため亀山殿を寺に改めました。それが天龍寺です。藤原定家が百人一首を編んだ別荘も、この地のいまの二尊院の近くにありました。後の東山文化発祥の地もそうなのですが、山際にいろんな皇族・貴族の離宮や別荘が連なってあった。それがいまお寺になっている。仁和寺も大覚寺もそうです。そういう系譜・履歴を京都の寺やお庭はもっています。

だいぶ横道にそれましたが、嵐山の常緑樹への植生移行が進んで来ていて、モミジとかサクラの山をどういうふうに保全するのか、これがたいへん大きな「社会的」な問題となっています。

写真 6 は護王神社で、和気清麻呂を祀ってあるところです。普通は狛犬が置かれている場所にイノシシがいる。これを理解するには、仏都奈良から脱出して都を京都に移した時のいきさつを知る必要があります。

聖武天皇は平城京の朱雀通りの一番北に大きく映えていた大極殿を東にずらし、そして都にそびえ立つ大仏殿という大建築物を造営しました。南都六宗の仏都を聖武天皇はつくったのです。仏教と天皇家権力とのつながりがあまりに強くなり，やがて道鏡という仏僧が天皇家の中に入ってくるという事態も生じます。和気清麻呂が道鏡のはかりごとを見破って追放を受ける。その時に救ったのがイノシシということなんです。

戦前の 10 円の紙幣にこの護王神社が描かれていました。

（写真 5）現在の嵐山とかつての嵐山の姿

（写真 6）護国神社と旧 10 円紙幣

京都における自然と文化
（「森から人へ、人から森へ」）

桓武天皇は奈良を脱出して、まず長岡京を都とします。しかし、ここは水に浸かりやすい、水害が起きるというので、794 年に京都・平安京に遷都したわけです。そして最澄と空海により、山を背景にした山林仏教、平安密教という新しい組み立ての仏教が誕生します。

比叡山延暦寺、その地は洛中から東北の鬼門にあたり、鬼門を封じる役割を担います。そのことによって追われた鬼の思いが、お能の『大江山』などで伝えられていますが、おもしろい。ここでの密教は天台密教ということで、台密といわれています。

一方の東寺。ここが空海の真言密教の根本道場となります。東寺は教王護国寺とも八幡山東寺とも称せられ、石清水八幡宮と東寺が裏鬼門封じの役割をもっていました。

東寺には2万余の国宝・重要文化財があるのですが、国宝の両界曼荼羅図の公開が宝物館開設 50 周年を記念して催されましたので、2 週間ほど前にいってきました。こちらが胎蔵界曼荼羅で、大日如来が中心にして同心円状に広がって行く格好で幾多の佛さんが描かれています。こちらの方は金剛界曼荼羅です。

……　講演は時間の都合でここまで　……

（北尾さんからの補足）

講演では、準備した「レジュメ」を手元に置いて、20 枚ほどのパワーポイント映像を説明しました。ただ、時間的な制約があってカットしたものも多く、わ分かりにくいものになったと反省しています。また、「アウトライン」と映像のなかで、出典を極力明示することに努めましたが、これも時間的制約が主な理由で、話のなかでは省略したものも多くなりました。さらに、考察した「むすびにかえて」の部分は話す内容としては難しいもので、記述したものを示すしかありません。

ということで、次から「レジュメ」の後半部分を転載させていただくことにします。今後の森林社会学の研究会での検討資料にしていただければ幸甚です。

（写真 7）東寺の胎蔵界曼荼羅

（写真 8）金剛界曼荼羅羅

◆ 平安密教 - 両界曼荼羅･立体曼荼羅（大日如来）
－ 仏性と神性と霊性の習合 － 空海の多様な書体
－ ひらかな文字の創発
◆ 比叡山延暦寺･本覚思想「山川草木悉皆成仏」[
－ 鎌倉期仏教の浄土思想と禅宗（法然・親鸞、栄西・道元）－ 室町期の京都五山・山号・禅林 ］（鎌倉期になって里・民衆の仏教へ、ないしは命のやり取りをする武士の仏教へ。山号：全国各地にある末寺が本山と山の精気を通じあう、気脈を通じあう関係）
◆ 東山文化（茶の湯、書院造り・数寄屋造り、水墨画、花を生ける・花を立てる）と北山・鷹峯（たかがみね）文化本阿弥光悦・俵屋宗達・角倉素庵の「嵯峨本」（辻邦生『嵯峨野明月記』）

両界曼荼羅・立体曼荼羅 - 大日如来（曼荼羅＝本質なるもの、密なるもの）
胎蔵界曼荼羅：（大日経）大日如来が中心に位置する。その慈悲の光が隅々にまで広がっていく（同心円状に無数の女性的な表情・仕草の仏像が描かれている。普遍愛）
金剛界曼荼羅：（金剛頂経）9つに区切られた相対的な世界、かつ修業とロジカルな力によって段階的に悟りを深めていく。双六のようなゴールへの求心力をもつ集合体。抽象的で理知的展開。
双方の界があって世界が見えてくる。大日如来＝太陽・自然、宇宙的原理
われと大日如来・自然の一体化［大日如来がむこうから飛び込んできて、突如・即、自分の身体がすっぽり大日如来のなかに吸収される境地が開ける］：即身成仏
立体曼荼羅：大日如来を中心にして五智如来（ごちにょらい：密教での5つの智恵を5体の如来にあてはめている）、向かってその右に五大菩薩（中心は金剛波羅密多ハラミッタ菩薩）、左に五大明王（中心は不動明王）、そしてそれら外側に須弥壇の境界を警護する四天王と梵天（ぼんてん）および帝釈天が配置されている。21尊体の配置と大きさ。この配置・編集のデザイン力。そして、仏像や荘厳の美しさ。なお、平安期になって仏像は木彫りのものになる（以前クスノキを用いた仏像も散見されたが）。

空海の多様な書体（自然との通態へ） ：ひらかな文字の創発
漢字で書かれた毎日読むお経。声明（しょうみょう）。どのような発音で読めばいいのか、漢文のお経で、漢字が置き忘れてきたもの。
空海は、文字だけでなく、言葉と声と文字の関係を独自に考える。経典の漢字の奥にある、もともと仏教の誕生地である梵字の世界。
他方、日本言葉で心に浮かぶ日本的な感覚・感性をどう文字で表現するか。日常の記録「日記」による脱漢文化ということでの「ひらかな」の発展
空海・大和州益田池碑文：文字を超えた文字、具

立体曼荼羅（東寺）

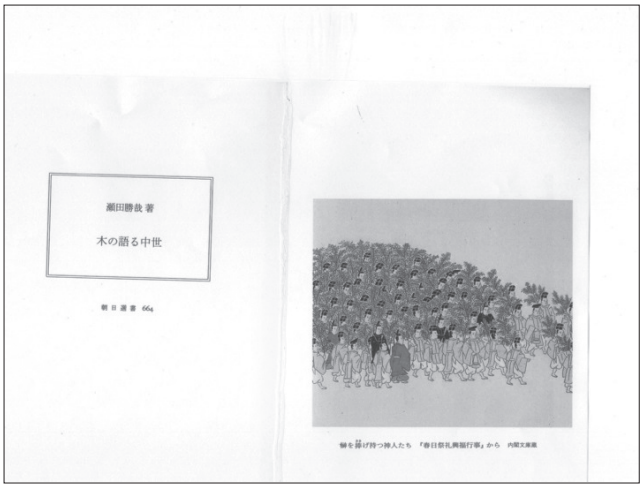
空海・大和州益田池碑文

象性の高い「雑体書」。「益」の上には雲が書かれ、「池」のサンズイは水になっている。連綿体の草書で、来るべき仮名の出現を予告するもの。飛白体(ひはくたい)。
自分の内なる自然と通じ合う文字、そして神や外なる自然と通態させる。

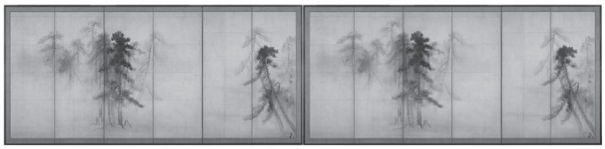
中国的な文化を「乗り越えて」いく日本・京都的文化
平安宮内裏の紫宸殿前庭に植えられていた「左近の梅」が、960 年の内裏焼失を機に「左近の桜」に。
「榊を捧げ持つ神人たち」(瀬田勝哉) の映像
榊（さかき） 結界のため四方の境目に立てた境木

・作庭記（石を立てる・石が乞う）－ 代償景観、縮景の庭園、枯山水の庭へ
・長谷川等伯「松林図」(安土桃山時代)、竜安寺の庭
・祇園祭（祇園御霊会)・「山鉾」巡行・神輿渡御
・お能の世界 – 能舞台（橋掛り、影向の松)、五番目物（鬼・天狗・雷神など）
竜安寺石庭　長谷川等伯「松林図」:
質感・しめり気をともなった奥行き。余白の中に、自らを無にして入り込んでいける。それを受け入れる庭、墨絵

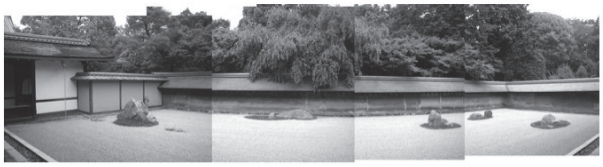
[祇園祭]
明治以前までは祇園御霊会（ごりょうえ）と称した。
山・鉾巡行 「山」に立てている松 「鉾」の長い柄である「真木」(六角堂・紫雲山頂法寺：聖徳太子はこの地に立っていた神の霊が宿った大木を伐って難波の四天王寺を建立した） なお、霊木のコケラにも霊は宿りつづけている（新生としてのコケラ落とし)。



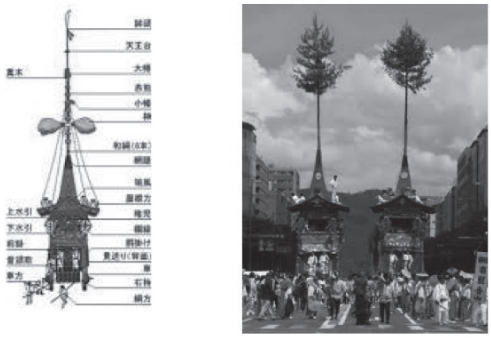
長谷川等伯「松林図」



竜安寺石庭

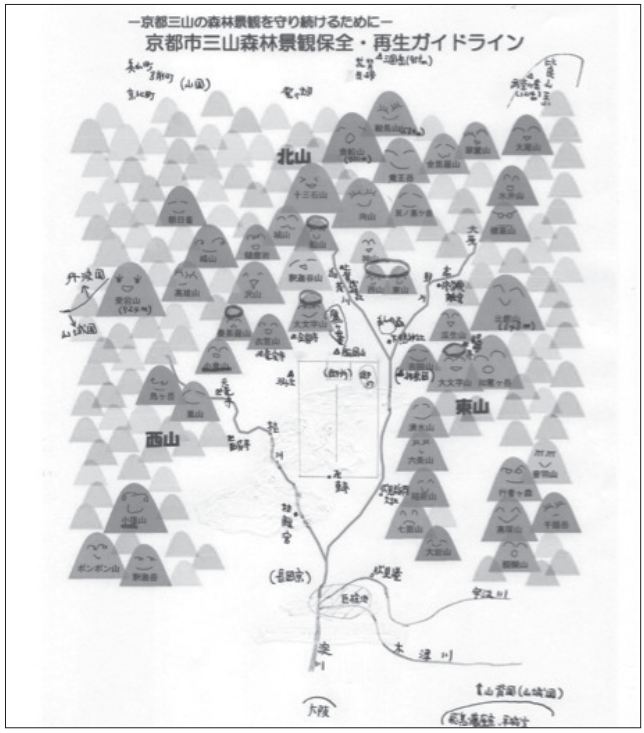


祇園祭の山と鉾



Cf.　森に住む神々を一神教が征服・支配したキリスト教の文明史（関係性の中の文化は生まれない）
ハレ（ケガレ･気枯れを払う）。街を巡行し、ケガレ･厄を引き受けて帰った後、すぐに解体。
また、〈遊〉の真骨頂・富裕町衆・動く美術館。世界の最高水準の織物で飾る。
なお、〈遊〉は、神の訪れ（音連れ）を待つだけではなく、「すさぶ・あそぶ」して（みずから出向いていって）、外界の自然・精気・神・エネルギーを引き込む。マツリで潜勢力である「気」をとりもどす。（松岡正剛）

［五山送り火］や「大」のひとつの解釈（西村公朝、東京芸大教授、仏師、僧侶）：
京都の都全体を護摩堂、御所を護摩壇にみたて、清浄である火中に仏を迎える。「大」は大日如来の「大」。東山・如意ヶ岳を退蔵界、金閣寺北の衣笠・大北山（左大文字山）を金剛界とし、松ヶ崎・大黒天山の「妙法」は法華経の経巻本尊を示し、西加茂・明見山の「舟形」が水天に、火の神を祭るとされる愛宕山のふもとの水尾山・愛宕神社に「鳥居の形」を刻んで火天とした。空海が京の都から死霊、悪霊を退散させるために始めた護摩焚（ごまたき）にもとづく。（中川登史宏『京都御所・離宮の流れ』）



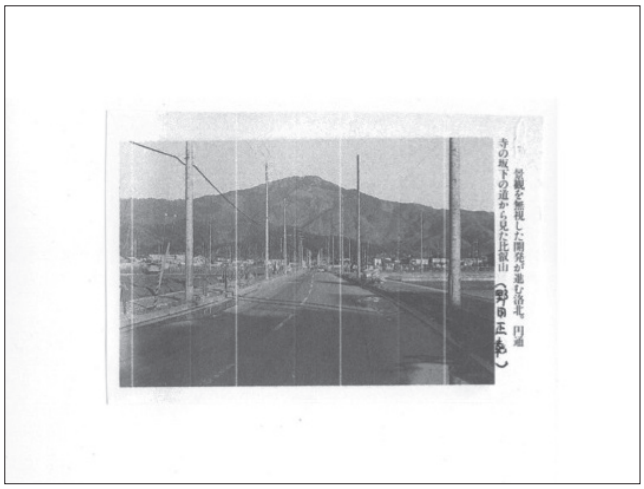
［能の世界、能楽の舞台］
大原や 小塩の山も 今日こそは 神代のことも 思い出づらめ（「小塩」）
ここで「神代のこと」を思い出す行為の主体は、大原神社の御神体である小塩山。在原業平が前シテと後（のち）シテで登場する複式・二場物。夢幻能をつくりだした、そして橋掛かりのむこうから死者や亡霊を呼ぶ能舞台をつくりあげた世阿弥。橋掛りに沿った前面には間隔をあけて三本の松が植えられていて、本舞台正面奥の壁である「鏡板」には影向（ようごう）の松が描かれている。
寝てか覚めてか、ウツ（空・虚）かウツツ（現）か、の同時的感覚。一瞬が永遠である。

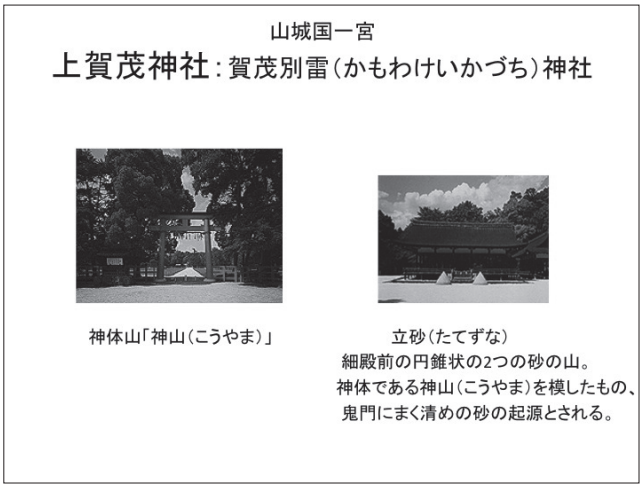
造園や京都の町づくりに見る自然の引き込み方や間合いのとり方

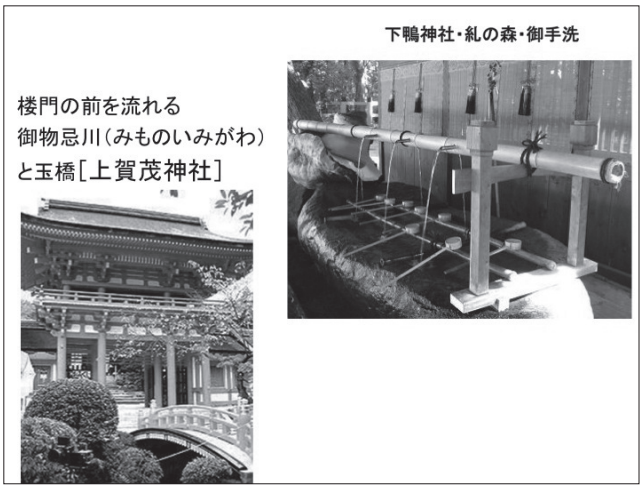
◆ 借景庭園と「縁」側
◆ 遣水（やりみず）と見たて
◆ 風景からの町づくり

［借景］
自然を引きよせる。風景を生ける。遠景を近づけるためのやわらかい技法。比叡山を借景にした円通寺の庭園：水平と垂直と斜線のリズムの調和
Cf. 同じ比叡山を眺める「殺風景」な写真を一枚

［遣水（やりみず）］
自然を和らげる・間合いをとる。見立ての風景を創る
山城国一宮（平城京時代は「山背」と呼ばれていたものを桓武天皇が「山城」に）
上賀茂神社：賀茂別雷（かもわけいかづち）神社のこと（カミナリは神が鳴る）　神体山「神山（こうやま）」を望む鳥居　立砂（たてずな）　細殿（ほそどの）前の円錐状の2つの砂山。神体である神山を模したもの
楼門の前を流れる　御物忌川（みものいみがわ）と玉橋
加茂川 から 水を引いて明神川（御手洗川）となし、上賀茂神社境内で楢の小川（奈良の小川）となり、そしてふたたび 加茂川へ
風そよぐ ならの小川の 夕ぐれは みそぎぞ夏のしるしなりける（藤原家隆）
禊（みそぎ）：ケガレを浄化して新しいものを生む（イザナギノミコトが左の目を洗うとアマテラスオオミカミ、右目を洗うとツクヨミノミコト、そして鼻を洗うとスサノオノミコトが出現）

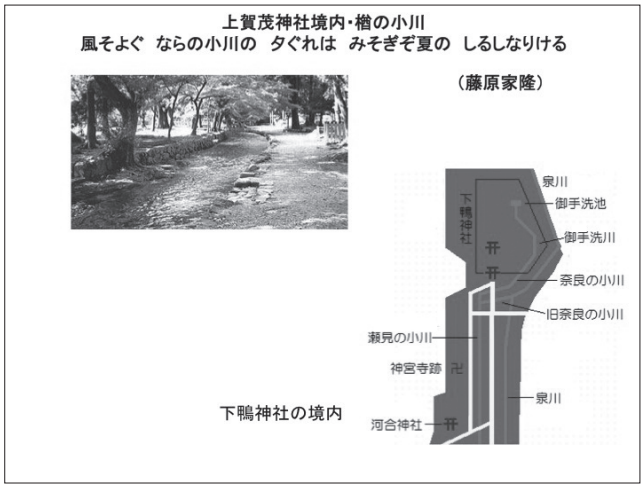






下鴨神社の境内
高野川からの分水である泉川、および御手洗川（これは湧水・池）が下鴨神社境内に。そして奈良の小川と瀬見の小川が流れる。
・賀茂川（左）と高野川（右）の合流点。奥に見えるのが糺の森
・一之舟入を出たところに復元された高瀬舟
・高瀬川と木屋町通り
・納涼床の下を流れるみそそぎ川（右は鴨川）
なお、鴨川本流の水源は雲ケ畑（雲ケ畑川 - 中津川 - 加茂川）本流とは別に、芹生峠を源とする貴船川、花脊峠を源とする鞍馬川が鴨川に流れ込む。日本神話では貴船川が鴨川の源流

自然の引き寄せ方、 対象との一体化ないしは入り込み方、 うつろひとものののあはれ、「我」の空への転じ方、 述語の論理・場所の論理（西田幾多郎）



・名月や 畳の上に 松の影（宝井其角）
・石の乞はんにしたがひて 石を立てる（『作庭記』）
・見渡せば 花ももみぢもなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮れ（藤原定家）
・絶対矛盾的自己同一（西田幾多郎）

［作庭記］
もともとの起伏、池の形、島と築山の形を考慮し、整え、最後に石を立てる（石を組む）
石のことは石に聞け：主体（造園家）の客体（石）への投影。ここではむしろ二つの主体の同時存在が前提になり、両者のあいだに、通態的関係・姿勢が生まれている。主体性のないところからは、自然とのなれあい、因習しか生まれない。 （オギュスタン・ベルク）
なお、仏像つくりに関して、「仏師が仏像を彫るのではなく、仏像が木の中から現れ出る」という言い方がある。

［なかりけり］
「花」や「紅葉」を出して鮮やかな色や形を一度ヴァーチャルにイメージさせておいて、それにまつわる記憶と光景をも直ちに消し去る。「なかりけり」という一語をつかって「負」を現出できた歌。見渡しても浜辺にはなにもない。浦の苫屋がひとつだけあるような、寂しい秋の夕暮れ、その光景だけを残してみせた。［茶の湯の世界でも評価が高い和歌］ 水を感じさせるために水を消し去っている（引き算）「枯山水」の庭も。（松岡正剛）

◆ 文化によって生けられた風景（「風景を生ける」）
景観とは、文化によってとらえられ、整形された風景である（野田正彰）
◆ 人間の文化の母胎である環境を風景として自覚する。

風景とは文化になった環境。
町づくりへのヒント － 山気水脈の穂先を取り

入れる
山の気配がずーっとまちのなかに入ってくる。深山から流れ出た山気水脈の霊気が市民の座辺に漂う景色。奥山・里山・神社の杜・路地を抜けて、家の庭までしなやかに続く余韻を掬（きく）したいものだ。（中村良夫）

［庭先からさらに一輪挿しの花壺が掛かった床の間まで通じている］

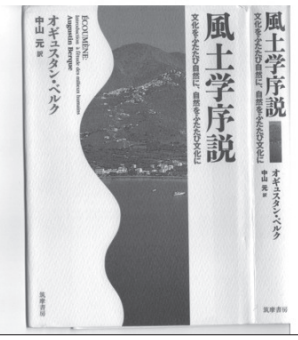
むすびにかえて
ー「文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に」

適切な規模での流域社会としての〈京都と森〉。その〈京都と森〉という「地」ないしは“能舞台”、のうえに現れる「図」としての〈風土の京都〉
そして〈方法京都〉

◆ 通態的（trajective）理性　［「しかしまた」の論理］と「成ること」の場所
Cf.　投影的（projective）理性　［主体が客体の上に一方的に投影するものとしての、計画（project）と進歩（progress）の文明を生み出したところの理性］　　pro は前に、将来に、まだ存在していないところへという意味
社会的なものの生態学的のものへの連接、その行程（トラジェ）、その変化の通態。主観と客観の中間にあって、通態性はメタファと因果関係を結合する。（オギュスタン・ベルク）

◆ 林業と森林社会の場所・間・編集
［原生的自然←環境的自然－［里山的自然 - 林業 - 森林社会］－文化⇒］
この古層・基層と重層構造、その生成するものとその場所。この「あいだの場所」にあるものの編集・デザイン。
Cf. 世界遺産に見られる西欧キリスト教文明的な「自然」と「文化」の区分
ちなみに、存在（ex-sistence: ex は外へ）、「文化」は自然のかなたに赴く（面向く）もの、文化化。しかし、文化の果てに自然を再発見する　芭蕉の「造化」。芭蕉にとって旅の具体的広がりにおける行程（トラジェ）は、人間を自然へと連れ戻す風景の行程（通態）でもあった。（ベルク）
なお、「日本をとりもどす」として、国家正義や国家神道を押し付けてくる国家権力（個・私に解体されている「国民」への押し付け）への警戒が必要。かつてのハイデガーも西田・京都学派も社会学・社会科学が欠落していた。市民社会論としてのコモンズ論、および市民的公共圏の創生へ。拙稿「市民社会論としてのコモンズ論へ」（井上真『コモンズ論の挑戦』所収）。

文化をふたたび自然に、
自然をふたたび文化に



鼎談

内山 節（哲学者、森づくりフォーラム代表理事）
北尾 邦伸（島根大学名誉教授）

コーディネーター：松下 芳樹（森づくりフォーラム 理事）

1989年の『森林社会学宣言』出版当時を振り返って

・松下　お二方は1989年に『森林社会学宣言』を出版された人、私はその当時に読んだ人ということで、私はみなさんに近い立場だと思います。私は行政マンをやっていることもあって、『森林社会学宣言』は政策上でも参考にさせてもらいました。

最近、内山先生にお会いした時に「先生、『森林社会学宣言』したんやけど、そのあと落とし前つけてないやないですか」ということを伝えました。皆さんもご覧になったら分かるように、宣言された方々は、もう相当お年を召されています。ぜひ元気なうちに、いったん落とし前つけてもらいたいということもあって、特にお二方を壇上にお招きしました。当時の振り返りや、その後の動きも踏まえながら、お話を伺いたいと思います。それが今後、森づくりフォーラムが行おうとしている取り組みのキックオフになればと思っています。

また、講演ではお二方に無理を言って、枠をつくってのお話をしていただいたので、内山先生には哲学的なお話を、北尾先生にはコモンズや里山のお話を敢えて封印してもらう形になってしまいました。これからのお話のなかでは、そういった部分もご披露いただきながら、今回テーマに掲げているものに沿って、お話を引き出してみたいと思います。

当時は何を見て森林社会学宣言となったのか、その視点から見たときに、この二十数年間はどう映るのか、それを踏まえて、いま、どのようなモチベーションを持っているのかといったところから、思うところをお聞かせください。

● 産業政策ばかりで森が遠くなっていて“人と森林の関係学”のようなものが必要に

・内山　二十数年前は、私は上野村に半分腰をかけて10年以上が経っていましたが、当時は上野村でも、だんだんと森が遠いものになっていました。すぐ近くにあるのですが、皆が使うものでもなく、入るところでもないという状況が進んでいたのです。

当時は、「どう需要を喚起して林業的にまわるようにしていくか」という産業政策の話ばかりで、そのような産業的な森林利用が強まれば強まるほど、そこに住んでいる人たちは森から遠ざかっていくというのが現実でした。もちろん林業がすごく儲かれば、その分だけは森に近い意識を持つのかもしれませんが、森林全体に対する関わり方は、どんどん遠くなり、ただ産業的な関わり方だけが残ってしまいます。しかも現実には、その産業的な関わり方も非常に厳しく困難になっていました。

また当時は、いわゆる環境保全や自然保護、森林保全ということが盛んに言われていた時代でもありました。これがまた、今まで関心を持たなかった人が「森林を守ろう」と言っている点では近づいたのでしょうが、森林そのものに近づいているとは到底思えないものがたくさんありまして…。

そんなことから、私は当時、「もう一度、“人と森との関係学”みたいなものをやっていかないとまず

いな」という思いがありました。それは山村的社会のなかだけでなく、都市の人、あるいはその中間的な農村地帯の人たちが森とどう関わっていくのか、ということも含めてのことです。それで、今日は三井昭二さんもいらっしゃっていますが、私は森林、特に林学系はほとんど素人ですので、三井さんの協力もいただきながら『森林社会学宣言』という本をまとめてみた、ということです。

その後、“森林社会学”という言葉は定着したけれど、内容が定まったわけでもない状態なのですが、それは当たり前といえば当たり前です。

例えば産業政策としての林業であれば、「林業政策はかくあるべし」みたいな形で、日本中のものを一定の理論で説明づけることができます。それに対して森林社会学は、あくまで京都は京都の森林社会学で良いし、上野村は上野村の森林社会学で良いのです。もちろん共通する部分もあるでしょうが、それぞれの独立性のほうが大きいのです。また、都市部の森林と人との関わりと言っても、東京と京都での関わりは同じではありません。そういった、それぞれの独自性を展開していくのが森林社会学なので、ひとつの理論で全部を説明しきれるという代物ではないのです。

ですからその後、例えばコモンズ論であったり、あるいは私たちのような森林ボランティアといわれる人たちが、森とどう関わっていくのかをバラバラには展開するけれど、森林社会学としてまとまった理論を提起するような方向にはきていません。ただ、私はそのこと自体はそれで良いのではないかと思っています。

● 森の価値観が転換していった時代
森という存在との豊かな関係性とは…

・北尾　『森林社会学宣言』という著書では、私は内山さんに声かけてもらって、知床問題について、すでに書いていた論考を収録していただきました。

当時は京都大学の持つ北海道にある演習林、知床のすぐ近くに勤務していて、よく知床半島歩きや羅臼岳に登ったりしていました。そこは原生的ではありましたが、ちゃんと林業の施業案もできていて、大きい木はちゃんと伐っていたのです。しかし1980年代の半ばくらいから、突如として「そうじゃないんだ」という、社会的な価値観の違いに遭遇しました。いまは「保存すべきものは保存だ」という、世界遺産等の概念と括りで地域指定していくというのは割合受け入れられていますが、そういうものが日本で初めて、知床で起こったのです。

林業的には割と丁寧に、大木をヘリコプターで出していたのですが、1万本伐ったら1万本の穴を空けることになります。それは立場を変えて、例えばオジロワシの目から見れば、住処が壊れるという事態になるわけです。「そうなのかも」と思いながらも、あまりにもマスコミの風潮が自然保護なので、ちょっと反発も覚えながら、「では産業としての林業はどう考えたらいいのか」ということを、当時の私なりに考えていました。

もう少し言わせてもらうと、私は京大の森林経理学というところに所属して助手になったのですが、林学には砂防とか造園、林業工学とか、いろいろな講座があって、それぞれ手法が違いました。そこにひとつの括りを入れるとしたら、計画学（名前としては森林経理学ということでしたが）だったのです。ですから九州大学も東京大学も、第一講座が森林経理学です。ある種、外から物的な形で秩序づけを与えるということです。農村には農村の工学があって、灌漑用水をどうつくるとか、圃場をどう整備するとか、都市なら都市工学があって、ライフラインをどうつくるか、ということです。そういう物的組織論として入りこんだわけです。

私は4年の時に、実習で1カ月屋久島に行っていました。当時、屋久杉がどんどん伐られていたわけですが、「いいな、すごいな」と思って現場にいました。その時の物的に市場にミートする考えとしては、林業が産業的にきちんとやれば、それに伴って公益的機能も漸進するという効用をもっているという中で、価値観がころっと変わったのです。

それで、言葉としては今もちゃんと理解はできていませんが「存在の豊かさ」というか、森という存在との豊かな関係性ということを徐々に考えはじめました。

また、当時の私たちにとっては当たり前だった入会（私の研究室の後ろには、入会林野の調査報告書のガリ版刷りがたくさん並んでました）とは違った見方で、そんな地域の“コモンズ”を捉えようということもまた起こってきました。さらには、流域管理という考え方も出てきて、私なりに考えを展開しながら本をつくったこともあります。いずれにしても、森との捉え方を変える、こういう見方もある、ということです。今日の京都の話でも、仏性や気・霊が生活の中で活きていた時代に、森・山と人間の関係のどのような原型があったかを考えていました。原生的自然や里山的自然の通じ合い方を意識しながらコモンズ研究もやっていました。

結局いまだに分からないのは、産業としての林業をどう捉え直して、どう入れこむのかというところです。今日は、むしろ内山さんにそこのところを聞きたかったのですが、上野村の話を聞いて、「上野村はものすごい存在やないか。もう、どんどんやっていける」と思ってしまいました。とはいえ、全国の山村で、そうはいかないわけです。やはり「産業としての林業をどう考えるのか。どういう土俵をつくれば、それが活き活きとしたものになるのか」ということが、今もって分かりません。

このように、『森林社会学宣言』で考えたことを、今も引きずっています。考え方や価値観を自分で変えてきましたけど、「でも、やっぱり」ということですね。今までは、木から森を見るというか、木と木材の市場に対応して展開するなかで、発展を考えて、林業政策とか森林経理学といった秩序づけというものを行ってきたわけですけが、そうじゃないものをどう構築するのかということです。まだ私には分かりませんが、大変面白いところだと思っています。

森林ボランティアの隆盛と下降気味の現状をどう考える？

・松下　今はちょっと下降気味ですが、森林ボランティアは、1990年代にものすごい隆盛を迎えました。そのひとつの要因として、ちょうど同じ時期にNPO法ができたこともあって、市民活動にスポットが当たったこととの相乗効果があったと思います。個人的には、この盛り上がりだけで「ああ、森林における市民社会が実現するな」という大き

な錯覚をした過去がありまして…。

お二方は、その当時の盛り上がりや、現在の下降気味の状況も合わせて、どのような感想を持っていたり分析されているのでしょうか。唐突かもしれませんが、敢えてこの評価をお伺いしたいと思います。

● 森林ボランティアは「もうひとつの仕事づくり」現在はその方法論が多様になってきた

・内山　当時、「日本における森林ボランティアとは何か」というのは、意外と難しかったですね。例えば記念植樹のような、行政が音頭をとって山に苗木を植えるといったものも森林ボランティアと言っていましたが、これらはイベント的に行われていたものです。それらに対して、継続的に活動していこうとする人たちもたくさん生まれてきていました。その人たちが、どんな意識を持っていたのかとなると、「森が好き」ということにある種の共通性があったと思いますが、私自身は「もうひとつの仕事づくり」と思っていました。

考えてみると私たちは、日本の歴史の中で長い間、多様な仕事を持って生きてきた“多職の民”でした。農家にしても農業だけやっているのは最近の話で、それまでは職人仕事も、ときには物売りもやったりと実に多様なことをやりながら、正に百姓として生きてきたのです。ところが、特に戦後の高度成長期以降になると、“一職の民”になっていきます。収入を増やしていくときには一職でもよかったのですが、それである程度生活ができるようになってくると、一つの仕事しかしないがゆえの限界といったものが意識されるようになっていきます。だから「もう一つ、別の仕事をつくろう」ということなのです。

仕事というのは、お金にしないとまずい仕事もありますが、「お金にはなりません。時には持ち出しです」というような仕事もあって良いのです。そういうバランスを取り直そうというときに、「森が好き」ということならば、「じゃあ森のなかに仕事をつくろう」ということです。もちろん本職ではないから年間250日も働くことは出来なくて、せいぜい年間20日間といった働き方になりますが、それでも一つの仕事といいますか。そんな、多職性を回復するという中で、「とりあえず二職くらいでいくかな」という感じが、森林ボランティアを継続的に活動している人には強かったのではないかと思っていました。

いまは、その多職性の回復みたいなものが実に多様な形で展開し始めています。そこに次のテーマになる予定の“ソーシャルビジネス”もあるわけです。収入にならないと困る仕事もありますが、もう少し社会と関わるための仕事とか、自分自身が生きてくのが楽しくなる仕事とか、いろんな仕事のやり方があるわけです。その多様さや展開が広がりによって、それが必ずしも森林だけに集中するわけでもなくなってきたように思います。

つまり、森へのボランティア的な協力という感じよりも、自分の労働の捉え直しということがあってこその森林ボランティアだったのす。いまは、その方法論が多様になったことによって、森林ボランティアの活力が落ち目になってきたのかな、ということであって、私はこれもまた良いのではないかと思っています。

● 行政や市場システムとは違う生活世界から市民は森をどう捉えるのか

・北尾　私は90年代、短期ですけれどアメリカへ留学する機会がありました。アメリカにはナショナルフォレストの森林官が組織されているのですが、彼らは多目的利用、そして木材の持続的供給（multiple use and sustained yield）という形を全面に押し出していましたが、そういう考えをもうひとつ上回って、市民運動的なものが押し寄せていました。まず役所の方から巻き込むという、別に悪い意味じゃなく参加を促すこと（involvement）、それから参加（participation）、いろんな代替案（alternative）を計画の中で出しながら誘い込みをしていくのですが、一方、市民も市民でいろんな

価値観を持って、「森の取り扱い方はこうだ」ということが高揚してきていたのです。流域管理(water shared management）も、アメリカではそういう形で現れたもので、「市民がすごいところまで…」と思いました。NPM（ニューパブリックマネジメント）の時代でした。

日本では、私も幾人かは森林ボランティアで登場してきた人を知っていますし、島根大学の時に私も少しやったことはあります。センスは良いのですが、専門的にそれを詰めてやっていくとなると「やっぱり…」となるというか、それを持続させて自分の問題としていくという時に、なかなか難しい問題が出てくる傾向がありました。

ですから、市民イニシアティブ、ローカル・イニシアティブをどうするのか、私は公共政策学会に入っていたという経緯もあるのですが、行政システムや市場システムとは違う生活世界の中で市民がどう登場するかというのが面白いと思いながら、そういう目で森林の動きを見ていたことがあります。前近代の共同体の息苦しさとか拘束感、マイナス面は皆さんよりも知っているし、勉強もしてきました。そういう中で、市民とつながりながらという図式は描けるのですが、これをどう展開するのかということです。

市民社会が大地から take off して経済成長したのですが、もう一回 landing して大地をとらえ直すということを推進するには、やはりイニシアティブやボランタリー経済、社会的関係性といったものを大事にしながら、一緒に組み込んでいくことです。それは地域によってちがうと思いますが、そういうことを、これから始めなければならないと思います。

・松下　お二方の著書にも今日のお話の中にも“デザイン”という言葉がよく出てきていて、最後には「自分たちの生活世界のデザインのなかで、どう森とかかわっていくのか」といったお話になります。戦後の 30 年代くらいから、市民の日常生活のなかで森との関係を失っていき、文化的にもギャップが生まれた気がしますが、そういうものを踏まえて、我々は生活世界の中でどうやって森との関わりをデザインしていくのか、という視点ですね。

需要サイドから森へのアプローチとは？

・松下　もうひとつ、内山先生が「産業政策ばかりやってきて、その周辺の森との付き合いが抜け落ちている」ということで、午前中の森づくりフォーラムの総会では、「それはいわゆる供給サイドの発想で、今後は需要サイドの発想が必要だ」というお話がありました。

この、生活世界の中でどうデザインをするのか、また需要サイドの発想からどうアプローチするのかというところで、もう少し膨らませたコメントがいただけたらと思うのですが、いかがでしょうか。

● 人は森から何をもらっているのか それを意識できるのはやはり地域単位

・内山　人が森に関わる時というのは、やはり森から何かをもらう時なわけです。もらうというのは、直接キノコをもらうという場合もありますし、結果として水をもらっているといった場合もあります。例えば上野村は、この頃全く雨が降っていなくて、一部集落水道が枯渇しそうになっています。そういう視点から見たときに、「森は問題なかったのか」といったことも視野に入ってくるわけです。

ところが、先ほどの北尾さんとの話にも関わってくるのですが、もらっているものは水や山菜やキノコといったものばかりではなくて、実は絶えず、いわば“気”ももらっていて、それを村に暮らしている人間たちは感じています。村のなかには、気の流れが強い場所と、弱いとは言いませんが普通の場所があったりします。絶えずそういったもの（それを霊気と呼ぼうが何と呼ぼうが、言葉は自由ですが…）を体で受けながら生きているということが分かります。こういうことも、広い意味で言えば需要サイドの発想です。そんな需要サイドの発想が

あって、「だから森はこういうふうにしよう」とかいうことが出てくるわけです。

その需要サイドで木材的な利用が上手くいくということであれば、「そういう視点から森をつくりかえてみよう」ということもあります。ところが森林の場合、良くも悪くも、木を植えてから成木するまでに、最低50～60年かかりますし、ちょっと良い木にしようとすると100年という話になってしまいますから、やり替えがきかないわけです。日本の場合で言えば、戦後に植えた木が成木していて、「これ、どうすんの」いうことになっています。そんな制約があるという面もあるわけです。

日本の場合、農林水産省にしても林野庁にしても、政策官庁が産業官庁的な色彩を持っていますから、どうしても供給サイドからの話が展開してしまうというやり方になっています。実はこれが、いろんな意味で上手くいっていないということを認識しないといけないと思います。特に森林は「ちょっとつくり直しましょう」ということができませんから、いまある木をどう使うかとを考えざるを得ませんが、それにしても「供給を出したいから需要を喚起しよう」という話になっているわけです。それでも思うように需要は喚起されていません。

農業の場合、たしかに自給率は低いので「もっと供給増やしましょう」というのはあっても良いのですが、それをやればやるほど農民たちが嫌になってしまうという問題が起きています。経済産業省のエリアになってしまえば、多くの人たちが「これ以上増やす必要があるのか」と疑っているそうです。それでも政策としては、絶えず供給側から問題提起されているのです。

だからといって、消費者としての需要だけを考えてはいけないわけです。需要というと、もちろん消費者的需要もあるのですが、森であれば先ほどの話のように「気をもらっている」といった需要もあるし、水をもらっているし、他にもいろいろあるわけです。

そういうことを含めて考えるとなると、地域のなかに、持続的な循環系をつくるしかありません。これは国家政策の範囲には入りません。だから、ローカルな世界を前提に置かざるを得ないということなのです。せいぜい上野村ぐらいが最大の広さであって、それくらいでしかものを考えることができないわけです。そのレベルであれば、「私たちはいったい森から何をもらっているんだ」「森への需要ってどういうものなんだ」ということが、じつに多様に意識できますし、それを持続するために「どういう森林管理をしたらいいのか」「これからの森づくりをどうしたらいいのか」ということも、地域的に考えることができるわけです。そういう方向性を考えていかないといけないのではないかなと思っています。

午前中の総会で話したのは、「いま日本の政策は、金融市場にお金をばらまけば生産が増えるといった極端に供給サイドに寄っているけれど、生産を増やしてどうするのか。その先は何も考えていない」ということです。これはバブルを起こすだけなのですが、実際には生産も増えておらず、行き詰まっています。全体的に見ても、個別的的に見てもそうなので、「もう供給サイドから発想するのは、そろそろ終わりにしよう」ということです。むしろ需要とは何かを総合的にとらえ直すことが必要で、それが可能な場所は、やっぱりローカル世界ではないかなと思っているということです。

● 違った理論立てになっている市場の循環を自然循環の中に設定し直すことが必要

・北尾　森から何かをもらっているという意識から離れてしまったのは、都市サイドというか、そういう地に育っている人たちだと思います。

嘉田由紀子さんや鳥越皓之さんが生活環境主義を掲げて環境社会学会を立ち上げたときは、「遠い水」とか言っていましたね。山水を引いて生活水にしていた時は、皆で落ち葉さらいをしたりとか、いろんなことをやっていたのですが、いまでは水道で蛇口を捻れば水が出てくるわけです。そういっ

た、切れて遠くになってしまうということではない世界をどうやって再構築するか、ということがありました。

結局、金融という世界からすれば、農林業から何ももらっていないという気持ちになります。実体経済と離れているのです。また経済のメカニズムそのものも、工業生産のように、自然と切った後のものにを循環させていく中でお金が回っています。

いまの市場メカニズムで循環している経済と、自然の循環に委ねた第一次産業的なものがあり、そこは違った論理立てになっています。例えば循環型社会形成推進基本法ができてゴミを中心にしてリサイクルしていますが、それは人工エネルギーで回しているわけです。むしろペットボトル型社会になっていっています。農業・林業は太陽の恩恵を受けて、循環させていくエネルギーを本当はもらっているのですが、そういうものとは切れた社会になっています。

しかしこれは大きく見ての話であって、地域ごとではいろんな循環や組み合せが考えられています。これが要するにデザイン、編成するということです。デザインという言葉は、どんなふうにつながりを持たせるかにおいての校正や編集性にも力点をおいて、私は使っているのです。それもトップダウンといったものではなく、自然と対峙したときのセンスというか、繊細な配慮といった精神というか、技術的にしなやかなというか、そういったものを組み合わせる中でのデザインということです。

成長の経済の追求という構造のもとで忘れられてきたものを、もう一回、場所を確定しながら、また設定しながら取り戻していき、その中で労働の体系もあるということを考えています。

ローカルだけで解決できない問題は？ 都市住民をどう手引きしていく？

・松下　顔が見えるといった枠組み範囲であれば、循環もよく見えてチェックもできるというお話は理解できますが、例えば上野村だけでは完結できない問題もあるはずです。また、上野村は上野村ローカルで完結していただいて結構なのですが、例えば東京のど真ん中にいる人のローカルというのはどうなるのでしょうか。東京ローカルもあるでしょうが、おそらくこの人たちは、上野村みたいなローカルではないと思うのです。そういう人たちの人口の方が圧倒的に多くてお金も持っているという日本社会の構造の中で、そういう人をどう手引きしていけばよいのでしょうか。

● 田舎と都市は互いを必要としている その関わりあいのなかで持続的社会づくりを

・内山　都市の暮らしが都市だけで完結できないことは、いろんな意味で分かってきています。そんな話の中で、昔は「都市は食料をつくっていないから、農村がなかったらやってけないでしょ」といった言われ方していました。それはその通りですが、いま感じているのは、都市だけで暮らしていると、そこに生きている人たち自身がだんだん追い詰められていく感覚が出てきたということです。何らかの形で田舎との接点を持ちながら都市で暮らすことが、どうしても必要になってきた感じです。

戦後の日本の高度成長期の第一期世代の人たちは、田舎から東京や大阪へ出てきていますから、田舎との接点を何となく持っていました。ところが気がついてみると、いまの東京の高齢者は田舎との接点がなくなっている世代が非常に多くなっています。その次の世代になると、初めから田舎がない世代になっていきます。そうなると、何らかの形で田舎との接点を持ちながら東京で暮らすことをしていかないと、なんとなく何かが足りない感じと言うか、自分の生きている実感として、やはりどこかに接点が必要なのです。

実は、それは田舎の側も同じです。上野村も、上野村だけで自己完結できないわけで、例えば外貨を稼ぐためには観光客に来てもらわないといけません。講演でお話ししたように、上野村に来る観

光客は、「何も開発していないから良い」という人たちです。実際には、トイレなどは非常に良好なものを配置したりしているのですが、基本は変えないという形で応えています。それは上野村が、観光客をいかに“村を共有してくれる人”に変えていくかという課題を持っているからです。上野村はいま人口が1350人ですが、村長は「もう少し減ってもいい」と言っています。というのも、江戸期はずっと1000人くらいだったのです。ただし、人口1000人でやっていくためには、外部に協力してくれる人が2000～3000人必要です。孤立してしまったら、それはもう自滅の道なわけです。

そういう意味で田舎の側もまた、都市の人たちに自分たちの村を共有空間として開放することによって一緒に歩むことが必要なのです。一方で都市の側の人たちも、都市で生きていくために田舎との関わり必要にもなってきています。そんな関わりあいの世界の中で持続的な空間をつくっていくと考えれば良いのかなと思います。

・松下　それをいかにつくるかなのでしょうが、先ほどのお話のように、森林を扱っているのはほとんど林野庁であって、そこが進めている産業政策だけではいまのような話がこぼれ落ちてしまう、ということもあるわけです。そういう政府の動きの影響力が大きい現実の中で、どう臨んでいったら良いのでしょうか。

● 安定社会のための多様なデザインのなかにはローカルから出発することもあると思うが…

・北尾　安定社会をどうデザインするのかということでは、資源や人口とかに対してある方向性を見出しながら、多様にデザインしながらやっていくことを、ローカルの方から出発するという手はあると思いますが、こういう話になると私の領域を超えてしまいます。

結局、日本は、国家が廃藩置県によって地域をつくり、官治集権のもとでの国民もつくっていったのですが、この国家と地域とのつながりかたは、ドイツに比べても特殊だったと思います。いまは国家からの予算が上から分配されて、それが地域社会を支えているわけです。この議論は、それをどう打破するのかということに及んでいくのだと思います。そこには、安定社会を生活レベルで、自分たちでつくっていくというボランタリー経済が大事になってくるというように思いますけれど、それをここで議論するのは、ちょっと自信がありません。

・松下　そういったことを森林分野に限ってもう少し深められたら、というのが質問の趣旨だったのですが、ちょっと言葉足らずでした。

住民と共に動く仕組みづくりは時間が必要
地域づくりはそれなりの覚悟が必要

・松下　質問書をいただいたなかで、上野村関係の質問が多くありました。読み上げますので、内山先生には総括的にお答えいただければと思います。

「地域づくりと外部の人びとのところで、村や地域の人だけで地域づくりを行うのではなく、村に協力してくれる外部の人たちとの関係を結んでいくということでしたが、協力関係を結んでいく場合の共有空間、世界とは具体的にどういうものでしょうか。例えば地域の人、自然環境、風土、文化に対する思いなのでしょうか」

「上野村への共有空間とは、内山先生にとって何だったんでしょうか」

「共有空間とローカル信仰、森林との関係がいまひとつイメージできないので、もう少しお話していただけると幸いです」

「上野村のような微少な村こそが、自給自足、持続可能型の自治体なのに、政府は大型合併こそが生き残りと言っている感がある。それに対するコメントをもらいたい」

「関東大震災を考えると、東京こそが限界集落と思うのに、人びとの東京集中が続いていることに

対してコメントをいただければ幸いです」

「上野村は上野ダムによる法人税収が財政基盤となっていると聞いていますが、この財政基盤が行政プラス組合、第三セクターによる村づくりの前提条件ってなっているんでしょうか。ペレットとチップと選択する際の基準はありますか。個人的にはチップボイラーによる両義の活用がよいのではないかと思います」

・内山　上野村は、いわゆる住民票を持っている人の20%弱が、1975年くらいから新しく来た人たちです。その人たちは当然、はじめからいろんなつながりを持っています。

それとは別に、村に引っ越してくるわけではないけれど、村に協力してくる人たちも生まれていて、そういう人たちをアドバイザーとか顧問といった形で無給採用をしているということもあります。上野村には、小学校高学年と中学生の子どもたちが1年単位で村で暮らして村の学校に行くという山村留学の制度もあり、その親御さんたちが協力者になっていくというケースもあります。この協力者というのは、1年、2年でつくろうとしても制度だけつくって機能しないということになりかねないので、やはり時間かけてしっかりやっていかないといけませんが、そうしていくうちに「この村と協力関係を結びながら自分は生きている」といった共有感覚が出てくるわけです。

私は、平成の合併は大変な失敗だったと思っています。合併するかどうかは地元で決めるべきことで、合併したほうが良い地域は合併すればいいのですが、逆に分離して小さくなることも認めていなければおかしいのです。これを認めていない、実に変な法律です。実際に、合併することで自分たちの世界があやふやになってしまうという問題が起きています。いつか“分離も可能”という法律をつくっていかないと、単に行政が大きくなるだけで住民自治ができなくなってしまう気がしています。

上野村は、比較的自由にいろんなことを行えるのは、先々代の村長が40年間村長を務める間に、無駄なお金はいっさい使わないという感じで30億円台という年間予算分ぐらいの貯金を貯め込んで、少々の嫌がらせにも耐えられる財政基盤をつくったということがあります。今の上野村は、その村長のラインが続いているわけです。

また上野村は、平成の合併をちょっと早めにキャッチして、それで渋々ながら村の奥に揚水発電のダムをつくることをOKしたという経緯があります。旧建設省は上野村に8つのダム計画を持っていて、それを全部認めると村は全て水没してしまうので、このダム計画をつぶす歴史が戦後の上野村の歴史と言ってもよいのですが、村長も「これだけはやらせてくれ」ということで、私としても「いやなんだけど、しょうがない」という感じですが、そのことによって、とりあえず交付税の交付団体になっています。

こんなことから自主財源論理になっていて、比較的制約なくいろんなことができているというのが、現在の上野村です。

つまり、急に効果が出ることを考えてもだめだということです。上野村は元の村長が方針をはっきり決めてから50年経って、やっといろんな成果が出てきてるという感じです。首長が変わる度に“地域活性化の新方針”みたいなものを出しているようでは、だめに決まっています。やはり住民が納得して一緒に動けるような仕組みつくっておかないと、本当の力は出てきません。そして、それだけの時間をかけるだけの決意が地域社会にあるかどうか

だと思います。

会場フロアからの声

・松下　せっかくですので、会場からもご意見を伺いたいと思います。ご意見がないようであれば、三井先生から『森林社会学宣言』のもうひとりの執筆者として、落とし前の話をお願いします。

・三井昭二氏　『森林社会学宣言』が出版されたのは1989年の4月だったと思います。当時私が勤めていた林業経済研究所に内山さんがいらっしゃいまして、それでぱっぱっと手配されて、わずか半年も経たないぐらいで本が出たのが不思議でしかたがなくて、「内山さんの出版する力はすごい」と思ったことを思い出しました。私は今年度まで三重大学の非常勤をやっていて、2年生の「森林環境社会学」と、3年生の「森林政策学」という講義を持っています。その森林環境社会学では、『森林社会学宣言』の内山さんのところと北尾さんのところを、いまでも講義のネタとして使わせていただいています。

振り返って考えてみると、内山さんは「はしがき」のなかで、当時は産業としての林業と、一方にいわば原生的自然保護、preservationの世界の自然保護しかない自然保護があって、その間に…という形で問題提起をされていました。

論点のひとつは、原生的自然保護しかないという考え方に対する、「そうじゃないんだ」ということでしたが、いまの段階では、少なくとも自然保護に関しては明らかに変わっていて、里山的な考え方が出てきています。私は「原生的自然保護も、林学的観点からは原点としてあります」といった形で講義するのですが、いまではむしろ農学的観点で「もう原生的自然保護はありません」という考え方が若い人の間ではびこっていて困っています。当時とは逆になりすぎているわけです。

もうひとつ、先ほどから話になっている産業的林業の視点の問題があります。これについては、やはり日本林業が長い間、ある意味では今でも低迷しているわけですが、どちらかというと、産業的な林業を正面から考える必要がなかったような状況が、10年ぐらい前から急激に変わりつつあって、そのなかで産業的林業をどう考えるかが、あらためて問われているのかと思います。それについて考えを述べると時間がかかりますが…。

そんな形で、出版から26年間の推移があったかと思っています。

・箕輪光彦氏　三井先生のお話に関連して、私も三重大学に4年おりまして、1984年に「森林社会学」という研究室をつくりました。

当時、笠原六郎教授から、「きみ、将来この研究室を発展させるとしたら、どんな名前がいいか」と、相談を受けました。ちょうどそのころ、渡邊定元さんという、元林野庁で東大にいらした方が『樹木社会学』という本を書いていて、「樹木社会学というのは面白いのだけれど、なんか樹木っていうのが気になるよ」みたいな感じでしたね。それで私が「これからは“森林社会学”でいったらどうですか」と言ったら「君がいうならそうしよう」ということで決まったのです。考えてみると『森林社会学宣言』が出版されるより5年くらい早いんです。これ、自慢話じゃないんですけども。

ところで、北尾先生のお話にもちょっと出てきましたが、私の専門は森林経理学です。実はこの森林経理学は、ドイツから入った当時は森林設制学、つまり制度を設ける学でした。当時、御料林では20年間森林設制、要するに森の中にある秩序、かたちをつくりあげていくということでやっていて、それを東大の初代森林計画教授の志賀泰山先生が、設制学として山林会で1年間原稿を書いていました。ところが、それを出版したときに、突如として“森林経理学”としたのです。その序文を読むと、「経済合理的にやるのが近代的。これからは経済合理的に森林を扱っていくんだ」ということを何度も言

っていて、経済合理的を詰めると経理となるのです。

経理学にはもともと、収め整えるという意味と会計学的な意味があるのですが、そうではないのです。志賀泰山先生は経理学の教授を辞めてから東京大林署の署長になり、それを辞めてからは化学の世界に入ってずっと研究を行っていたくらいですから、物理学とか生理学と同じように“経済の理”ということを言いたかったのだと思います。

・松下　ありがとうございました。では、加藤鐵夫さんから、「産業的にも新しい局面にきているよ」といった部分でコメントがあれば、お願いします。

・加藤鐵夫氏　産業論の議論でいえば、私はどちらかというと、三井先生のお話があっているのではないかと思います。

戦後の木材需要がものすごかったときに木をかなり伐ったので、資源的にはそれでかなり落ち込みました。それがやっと育ってきたというのが現在の状況です。逆に言えば、それをどう使っていくかという議論がやっとできるようになったわけで、その議論がはじまったのが10年ぐらい前からということです。

一方、産業論が議論されなかった中で、森林の多面的機能をどう発揮するかという議論はあったわけです。10年くらい前につくられた『森林・林業基本法』は、どちらかというと産業論を否定して、森林の多面的機能を前面に出さなきゃいけないという議論でした。その前身の『林業基本法』は、木材需要があるときの議論だったので産業論を全面に出しているわけです。それが下火になってきたなかで『森林・林業基本法』ができたわけです。しかし、森林の多面的機能の総合的な発揮を図ると同時に産業論ももう一回議論しなきければならないから、『森林・林業再生プラン』ができたときに産業論を一生懸命やったというのが現状だと思います。

先ほど林野庁は供給側ばかり見ているという議論がありましたが、では上野村だけ完結するのかというと、実は完結しないわけです。木材需要というのは現状でも7000万㎥～8,000万㎥あるわけで、例えば上野村の木材需要だけで議論ができるかといえば、そんな議論にはなりません。おそらく上野村の森林は、上野村だけで完結するような議論で使えるような森林ではなく、もっと意味がある森林だと思います。そこから供給されるもので、7000万㎥～8,000万㎥をどう使って満たしていくかを議論しなければいけないわけです。

森林社会学は、そういう産業論的、あるいは供給論的な森林全体をどう使っていくかという議論も、地域で森林がどうあるべきかという議論も必要でしょう。要は供給側の議論も、需要側の議論も、地域側の議論も、全国的な議論も必要であるという、議論の多様性を持つことが必要なのではないかと思います。

・松下　ありがとうございます。それでは香川県の木村晃子さん、なにかコメントはありますか。

・木村晃子氏　四国のうどん県から参りました木村です。私が森林ボランティアを始めた頃は作業の方に力が入っていたのですが、交通事故をやって腰を壊してからは、子どもたちの世界に入っていました。久しぶりに東京に来て、こういった自己啓発にぴったりのミーティングに参加させていただいて、非常に勉強になりました。森林社会学という、私にとっては新しい世界の扉が開きました。私は現場主義なので、この世界のことを勉強して、しっかりと現場に持ち込んでいきたいと思います。

森林社会学会は
とにかくいろんな人たちが集える場に

・松下　そろそろ、まとめに入りたいと思います。「まとめないほうがいい」という話もありましたが、なんでもありというだけでは、どこに向かって収束す

るのか、次にどんな議論したらいいのか、ということにもなります。

個人的には「いまの法や社会の仕組みには窮屈なことがある。それってなんなんだろう」ということを浮き彫りにしていくことも、社会的には必要だし、その軸足は市民側にあるような気がします。それが森づくりフォーラムの森林社会学会のニーズなのかなと思っています。

お二方には、今後、森林社会の研究や議論をしていくときの方向性というか、これから先に対するコメントを締めとしていただければと思います。

・内山　森づくりフォーラムが他の森林ボランティア団体と違う一面として、これまでいろんな政策提言を行ってきたということがあります。それはしっかりと意味のあることだったのですが、ここにきて「その路線でこれからも行けるのかな」という疑問も出てきています。私自身もそうですが、どうしても今までの惰性があって、そこから見てしまう部分があるわけです。その惰性を振り落として、違う発想も含めてゼロから検討し直すような作業をしなければならないという気がしていています。そういう場所として、森林社会学会的なものができればと、私自身は思っています。

例えば森林ボランティアの活動に加わって一生懸命、何年もやっていくと、それなりに分かってきて、専門家化していきます。これが曲者なのです。分かるというのは、その視点でしかものを見なくなる可能性もあるわけです。決して専門家がダメということではなく、その視点を突き放せるようなこともできる場所を、一度つくってみてもいいのかなと。ですから、方向性としてこうあるべきということではなくて、とにかくそういう場をつくろうというのが、私の想いです。

・松下　学会という場に長くおいでになっている北尾先生には、市民側からそんな名前を使っていこうとしていることに対して、ご指導やご忠告をいただければ。

・北尾　いまの学会は、ディシプリン、ひとつの型があって、そこでの専門用語を使って絞ったものしか論文として認めないというようになってしまっています。内山さんは、作品として本を書いて、自由に思うことを言えるわけですが、学会ではそんなことはできません。森林社会学会は、そんなものとは違う独自のもののようですから、そういうものがあったら面白いと思います。

もうひとつ、私は島根県の森林審議会や造林公社の見直し委員会などを務めましたが、こういうものにも市民の人から意見をいっていただいたり、外から包囲してもらえるようになれば、もっと内容がある新しいことがいろいろやれたのだろうと、経験上つくづく思います。

大日本山林会の130周年シンポジウムに講演させていただいた話が掲載された雑誌『山林』の記事を、お手元にお配りしています。要するに「なでしこでいこう」ということです。2011年のFIFA女子ワールドカップで、なでしこジャパンが優勝しました。それほど凄いプレーヤーがいるわけでもないのに、あの活躍をしてくれたことに感激しました。林業にもそんな場ができればいいと思いながら、話しましたので、お時間があれば読んでいただければと思います。

・松下　いま北尾先生がおっしゃったのは、「森林の扱い方に対して、もう少しものを言える市民になろうよ」ということです。そんな場であるとともに、一方ではぜひ研究者の方たちにも、自分たちの専門用語を分かりやすく市民に説明する場としても使っていただきたいと思います。そんな、いろんな人が集える場をつくることから、森林社会を実現していくきっかけになるような動きにしていきたいと思います。今後とも皆さんのご協力のほどよろしくお願いします。

本日はありがとうございました。

参加者アンケート（集計総数：26）

設問 1. シンポジウムについて

① 興味深く聞いた ―――― 24 名
② 普通 ―――― 2 名
③ 期待したほどではなかった ―――― 0 名

設問 2. 今回のシンポジウムを知ったきっかけ

① ホームページ ―――― 1 名
② メルマガ ―――― 6 名
③ フォーラム以外の HP ―――― 0 名
④ Facebook ―――― 4 名
⑤ ちらし ―――― 7 名
⑥ その他 ―――― 7 名 （日本林業調査会のメールマガジン、知人の紹介 等）

設問 3. メールマガジンの購読

① 購読している ―――― 7 名
② 購読を希望する ―――― 7 名
③ 空欄 ―――― 12 名

設問 4. シンポジウムの感想

・ともかく勉強になりました。色々な意味で、今後の参考にさせていただきます。
・地域ごとの森林社会学の考え方が参考になった。
・信仰・宗教をあらためて考え直すことと、その中に森林が含まれており、信仰・宗教とは使用しないものと考えることは難しい課題だと感じました。
・根本的な「問い」（課題・問題点）が理解（共有）しきれず、議論の焦点が最後までつかめませんでした。最後の質問のコーナーで、パネラー以外の何人かの方の発言があり、少し論点が見えた気がしました。内山さん、北尾さんのお話をもとに自分でも考えてみようと思います。
・鼎談の話が特によかった。講演は演者が伝えたいこと、知ってほしいことをテーマに設定すべきでは？
・学問としての「森林社会学」を開くシンポジウムではなく、「森から人へ、人から森へ」を感じるシンポジウムだったのかは少し疑問です。森づくりフォーラムのシンポジウムは、講師と聴講者という固定された形式が多いですが、聴講者間のグループ討論（ファシリテーター形式）、聴講者と講師との意見交換・質疑応答の時間も設けてほしいと感じます。
・2 人の語り口が面白かった。
・新たなお名前を耳にし、興味深くお話を聞けました。その方々の本に出会いたい。目からウロコで参加するたびに勉強になります。今後ともよろしくお願いします。
・経済など、既存のシステムとは離れた森林の価値をどう見出すか？

・森林を木材の資源として一般社会に供給することだけでなく、市民の生活の場が先にあり、森林の民もいる。森林は管理しなくても、毎年年輪の分だけ増える。日本国土の資源をどう使っていくか？
・期待した内容とは異なっていましたが、面白かった。「学会」化の動きは意外でした。
・facebook で内山先生の講演があると知り参加しましたが、専門的な話からローカルな話まで、色々な視点の話題が聞けてよかった。地域がどんなことを考え暮らしていくか考える際に参考にしたいと思います。
・森林社会学の今後に期待したいと思います。
・上野村では、村が一体となって森林を軸とした村づくりをしているのが興味深かった。
・新しい世界が拡がりそうです。
・考えることはあった。内山氏のローカルフィールドから考えて、というのは非常に共感。これは北尾氏の発表についてもあてはまる。北尾氏の「京都と森」という表題が難しく、何を語られるか予想がつかなかったが、苦渋しながら話されたことを私が感じたのは、「京都と山」＝京都は周辺の山とどう付き合ってきて、今後どう付き合うのがよいかといったことを、もっと意識的・自覚的に研究していけばいいのではないか、ということであったと思われる。それは森が生み出す水についても同様。京都の周辺の山は見える風景が、その更に後ろまで含めて京都を支えている、にもかかわらず、ほとんど自覚的になっていない。〈森林〉という言葉が思考をしめつけてしまっていると感じた。
・北尾先生のお話は、もっと時間をかけてゆっくり聴きたかったです。
・上野村の事例、西粟倉の事例など合併しなかった小さな村で成功事例があるのに対して、合併した・させられた昔の村で、ユニークな活動をしているところの事例を知りたくなりました。

設問 5. 今後のテーマについて（自由記入）

・山村の生活（石別の事例など）
・森林と市民（バラ色論ではなく、「市民」「市民社会」の限界をちゃんと議論すべき）
・里山資本主義的な具体例を下にした講座
・空家と地域づくり
・戦後合併したところの昔の村における森林社会のあり方（合併後の市町村の中での位置づけの中で）
・豊かな社会のあり方、持続可能型社会のあり方
・森の価値を社会全体で再評価するにはどうすればいいのか。
・森から遠ざかった下流の人は何を得て、何を失ったのか。
・必ず事例紹介を。

設問 6. あなたにとって「森林社会学」とはどのように考えますか。（自由記入）

・中山間地域での生き方・考え方が森林社会学
・楽しく生きる方法
・今までの学術的（大学の学生や先生方）だけでなく、市民（一般の方々）も多く参加される会になっていくのではないかと思いました。社会学は総合的分野となるので、そう言った意味で今までの森林・林業に関わる学会にない面白い学会になるように希望いたします。
・都市に住まいながら、いかに無理なく、しかし深く森林と関係をつくっていくことができるか。
・人よりの、人を大切にした考えと、森や生き物よりに考えたバランスがとても大切なんだと感じました。

森から人へ、
人から森へ

・便利な機器に振り回され、普通の生活ができない人が多くいます。私の夢は、引きこもりの人、退職した人で何もやっていない人などが森へ入り、役に立っている時間を生きる喜びをもてるような、そんな循環ができればいいなと思うのですが…（一石二鳥のはず）
・森林が人や社会をどう考えていくか。
・大変魅力的な概念だと思いますが、「宣言」から四半世紀たってもまだ固まっていないということを、よく考えなければいけないと思います。
・持続可能な、という考えと、森そのものの形が変わる（成長する）のに時間がかかるので、やはり考える側が持続的に考えうるシステムが無理なくできたらいいなと思いました。
・地方が個性を発揮できるチャンスがある。張り切りどころと感じました。
・小さな村のように森林と住民との関係が身近なところでは、森から人へ、人から森へということが実感できますが、森林面積が72%を占めるような私の居住市のように、山村が合併後過疎化している状況で、多くの市民は市街地に住んでいるところでどう考えて行ったらよいか、いろいろ学ばせてほしい。来年の全国の集いに期待したい。
・原生的自然保護と林業の中間に位置する人と森のより良い関係を、長期的視点で方向づける学問であってほしいと思います。
・原始時代からでも、森林があったから肥料として、水源として、燃料として、住居として人間が生活できてきた。酸素の生産と共に森林の役割を考えていく学問と思います。
・持続可能社会、生物多様性保全、豊かな人間性社会のくくりではないかと考える。
・「森林社会学」って経済学？ 人と森林との関わり方は様々にあるということがわかりました。もっと勉強します。今日は頭が混乱するぐらい、色々な新たな視点をいただきました。
・20世紀を通じて失われてしまった「森と人との暮らし」の関係を改めて見直し、今何が起きていて、これからどうあるべきかを明らかにする学問。女性の視点が入ると更に面白いのでは。
・森林は人間にとって、他の生物にとって、地球にとって必要不可欠なものだと思っています。森林を維持しながら生活をし、生きていける場や環境を前提にした社会づくりを導くものであってほしい。森林と産業、環境としての森林、生活と森林、癒しとしての森林などを包括したもの。地域によって「森林社会学」の内容は違ってもいいと思います。何か普遍的なものを追求する19世紀以前のような、哲学的価値観からは自由な、臨機応変・継続的な学であってほしいと思います。
・on-siteの学（森を土台とした）
・地域の活性化のために、森林をどのように利用して地域をデザインしていくかというように理解した。